

## 戦時下における自由学園の教育 (2) 戦時下「生活即教育」の諸相

村上 民

(自由学園図書館・資料室)

原稿受付 2020年11月26日；原稿受理 2021年2月11日

### Education of Wartime Jiyu Gakuen (2) Living Education in Wartime

Tami MURAKAMI

*Jiyu Gakuen Library and Archives*

1937年7月の盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が全面化していくが、政府は戦争遂行に「挙国一致」してあたるため「国民精神総動員運動」を展開し、学校教育にも積極的な参加をもとめた。こうした戦時下国民生活の「刷新」の動きに対して、自由学園は、1930年代から顕著になっていた「自由学園教育の社会化」の動きとも連続した形で、生活教育、工作教育、農業、音楽、体操、工芸など多方面にわたって取り組んだ。この背景には近衛体制を支える昭和研究会の社会改革・教育改革との関わりもあった。

自由学園女子部・男子部（中等教育）における「勤労奉仕」や「学徒動員」は、男子部の「工作」（工業、つづいて農業）と接続して実施され、女子については衣食住研究や農村セツルメント実践とも連続的に行われた。つまり、自由学園で行われてきた戦時の様々な「勤労」は、単に形式的あるいは強制されて実施したものではなく、自前の方法で主体的かつ積極的に行われた側面がある。とはいえ、こうした実践を国や文部省が指示してきた勤労奉仕・勤労働員の措置と併せてみると、明らかに対応関係がみられる。

戦争の長期化に伴い学校教育は年ごとに圧迫され、1945年にはついに授業停止の状況に陥った。この間自由学園は存続問題への対応に苦慮していたが、勤労奉仕・動員、男子部修業年限短縮、学校工場化、学童疎開、幼児生活団休止等に直面した。学徒動員や疎開、男子卒業生の出征によって生徒・卒業生の命が失われた。戦時の生活のなかに学びを見出そうとする努力が重ねられたが、敗戦により、戦争遂行のための「学徒勤労働員」と「学童集団疎開」は終了し、その片付けやまとめにも生徒自身が深く関わった。

戦時下に自由学園の教育に関わった人々によって、多くの記録が作成された、それらを記録群として丹念に注意深く再構成していく作業によって、戦時下自由学園の教育のなかにある様々な継続と切断の実相に迫る可能性がある。

**KeyWords:** 自由学園、羽仁もと子、羽仁吉一、日中戦争、太平洋戦争、キリスト教、国民精神総動員運動、昭和研究会、青年学校、各種学校、中等学校令、学徒勤労働員、国民学校、学童疎開

### 3. 戦時体制のなかの自由学園——教育実践を中心に 1937年～

#### 3.1 「国民精神総動員運動」への参加とその展開 1937年10月～1940年頃

##### 3.1.1 国民精神総動員運動への参加

1937年8月24日に「国民精神総動員実施要綱」が閣議決定され、これを受けて次々と関連の通牒が出された。9月28日「国民精神総動員強調週間生活刷新資料二関スル件」の「国民精神総動員運動実践事項」によれば、運動目標として(一)社会風潮の一新、(二)銃後の後援の強化持続、(三)非常時経済政策への協力、(四)資源の愛護が挙げられ、実施細目も示された<sup>1</sup>。「国民精神総動員運動」には学校教育も積極的な参加がもたらされた<sup>2</sup>。

9月に2学期始業式を迎えた自由学園は、同月30日に内ヶ崎作三郎文部政務次官による国家総動員についての講演を開催、10月13～19日までの1週間に「国民精神総動員強調週間」を実施している。女子部男子部の臨時委員を中心に、久留米村の出征兵士家族慰問等が取り組まれ、小学部でも一部実施された。

表1：1937年10月13～19日（第一回）国民精神総動員強調週間の実施<sup>3</sup>

実施日	内容
10/13(水)	時局生活の日 蠟山政道氏の講演「東亜の安定力としての日本」
10/14(木)	出征兵士への感謝の日 久留米村の出征兵士の家族に、女子部が御馳走を作り、男子部が自転車で届ける
10/15(金)	非常時経済の日 全校で輸入禁止の商品及び臨時資金調整法について一人が一品を受けもって独学し発表 小学部児童は不用品を自宅から持参など関連活動
10/16(土)	銃後の守りの日 特に全校生徒の健康に気を配る日 不健康〔体調不良〕なし
10/17(日)	神社参拝の日 男子部では午前一時豪雨について明治神宮へ暁の参拝。午前6時女子部、午前7時に小学部が参拝
10/18(月)	勤労報国の日 おにぎり節約した食費で、報国ビスケットを焼き、戦地へ送る
10/19(火)	心身鍛錬の日 長年の宿願であった全校無欠席が実現し、国民精神総動員週間の最後を全うした

この期間中に男子部で初めて神社参拝が行われ、以後1945年まで、1月1日、4月25日（靖国神社臨時大祭）、10月20日（靖国神社臨時大祭）には明治神宮、伊勢神宮、靖国神社への参拝が続いた。

また、3日目の10月15日から、小学部では朝の礼拝前に「皇居遥拝」と「君が代二唱」を行うようになったという<sup>4</sup>。初等部学校日誌によれば、前日に佐藤瑞彦（小学部主事）が出席した東京府私立学校校長会で遥拝が話題になったことが記されている。一方、女子部・男子部では、1939年3月14日の五カ条御誓文発効記念日で宮城遥拝と国旗掲揚を行い、その翌日からこれらが継続されたとの記録がある<sup>5</sup>。男子部女子部に先んじて小学部での宮城遥拝と国旗掲揚が始まった理由は定かではないが、自由学園では小学部のみが学校令の一条校であったことと関連があるかもしれない。

1937年にはこの他にも、蠟山政道（東京帝国大学教授、政治学・行政学、昭和研究会の中心人物の一人）による毎月の「定期講演」<sup>6</sup>や、自由学園体操会での「参宮縦走」（明治神宮から北多摩郡久留米村の自由学園まで）なども行われた<sup>7</sup>。

##### 3.1.2 生活合理化運動、「生活即教育」との連続性

自由学園では、「国民精神総動員運動」と銘打った活動が1937、1938年と継続して取り組まれた。また、時局認識の徹底のために「興亜奉公日」が閣議決定（1939年8月8日）されると、それに対しても学園は対応しており、1940年頃まである程度定期的に取り組まれていたようだ。

自由学園における「国民精神総動員運動」は、時局に関わる講演や学校生活での節約や生活訓練などにとどまらず、『婦人之友』や友の会が推進する貯蓄や生活合理化運動への協力や、地元久留米村の出征家族の生活を支援する活動など幅広く実施された。これらの活動は、1930年代初めから婦人之友、友の会、自由学園が取り組んできた農村セツルメントや生活合理化運動の延長線上で行われており、組織運営の面でも活動内容としても連続的に実施されていた。つまり、自由学園における「国民精神総動員」関連の諸活動は、従来から三団体によって取り組まれていた社会活動と連続的、並行的に行われたという特徴がある。

自由学園の「生活即教育」(1924年初出)<sup>8</sup>と戦時体制との接続はどこを起点にしているのだろうか。次節でその関連をみていきたい。

### 3.2 近衛体制と「生活即教育」との接点 昭和研究会メンバーとの関わり

#### 3.2.1 近衛体制に対する羽仁もと子・吉一の期待

1937年前後の『婦人之友』の巻頭言や座談会での羽仁夫妻の発言には、1931年満州事変後に示されていた「私たちの立場は武器を持ってする正当防衛すら明かに否定するものです。軍備縮小ではなくて、軍備撤廃です」といった論調は後退し<sup>9</sup>、近衛体制が進めようとする戦争の「早期解決」と「挙国一致」による社会改革の方向性への期待や共感が示されている。戦時という国家の非常事態（これは当初長期化しないと考えられていた）を、国民生活の刷新の機会として積極的にとらえるべきとの議論に、羽仁夫妻は明確に賛意を表していた。米谷匡史は、当時の多くのリベラル派の知識人、政治家、「革新官僚」らが賛同した「〈戦時挙国一致体制〉への参画を通じて国内改革の促進させる」動きのことを、「戦時変革」として定義しているが<sup>10</sup>、こうした社会改革（「戦時改革」）の方向性と自由学園の「生活即教育」には一定の接続がみられる。以下で具体的な関わりを確認する。

#### 3.2.2 昭和研究会メンバーとの関わり

1937年は近衛内閣成立(1937.6)、盧溝橋事件勃発(1937.7)といった大きな政治変動があったが、この前後数年間の『婦人之友』時事関係の評論や座談会等に、昭和研究会(近衛文麿を中心とする政策研究団体)<sup>11</sup>のメンバーが多く登場していることがわかる。彼等の多くは自由学園に子女を入学させるなど、自由学園の支援者でもあった<sup>12</sup>。

表2:『婦人之友』1937年時事関係記事及び羽仁もと子巻頭言(7月号以降)

発行時期	記事タイトル
1937年1月号	矢内原忠雄「〈毎月評論〉 日独協定と自由」
1937年2月号	佐々木惣一「〈毎月評論〉 立憲政治と生活の自律」
1937年3月号	蛸山政道「〈毎月評論〉 政変に現れた諸問題の批判」
1937年5月号	小汀利得「〈毎月評論〉 世界的好景気と物価高騰の問題」
1936年6月号	関口泰「〈毎月評論〉 総選挙とその後」
1937年7月号	羽仁もと子「私は面白いから生きています」
	尾崎行雄「〈毎月評論〉 近衛内閣の成立」
1937年8月号	羽仁もと子「団体と個人について考える」
	有沢広巳「〈毎月評論〉 財政経済三原則の意義」
	座談会「夏夜、世相を語る」 阿部真之助、石原純、長谷川如是閑、林蘆、牧野良三、正宗白鳥、三宅雪嶺、山柙儀重、羽仁吉一、羽仁もと子
1937年9月号	羽仁もと子「衣を売って剣を買へ」
	杉森孝次郎「〈毎月評論〉 北支及び支那問題の観察及び展望」
1937年10月号	羽仁もと子「家族日本の新面目」
	石橋湛山「〈毎月評論〉 支那事変は国民に何れだけの負担をかけるか」
	「戦時体制下において我等の経済生活をいかにすべき」 自治自発的統制輸入品の問題 物資の回収をはかる食料の問題
	「近衛首相、初の街頭演説を聴く 9月1日、『国民精神総動員大演説会』について」(山室善子記)
	座談会「時局を語る その一」(9/4開催) 芦田均、佐野常羽、杉森孝次郎、杉山元治郎、高橋亀吉、東畑精一、三宅雄二郎、山本鼎、蛸山政道、羽仁吉一、羽仁もと子
	われらの奉公運動「一日一銭醗金」 第一回醗金者氏名発表/醗金をこうして実行
	高亀格三「我が家に生産の余地なきか 果樹畑からみるならば」(果樹、養蜂など)
1937年11月号	羽仁もと子「家族国家の総動員」

	三木清「毎月評論」戦争と文化
	座談会「時局を語る その二」(9/30開催) 麻生久、阿部真之助、大口喜八、加茂正雄、那須皓、長谷川如是閑、本位田祥男、山本忠興、吉岡弥生、羽仁吉一、羽仁もと子
	「非常時対策 生活革新の実例」(地方の事例紹介)
	「一日一銭醜金」によるわれらの奉公運動開始さる(出征家族生活相談会、避難者と出征家族のための衣類セール、出征の家のための畳替えなど)／第二回醜金者氏名発表
	東北農村生活合理化運動報告
	その他記事多数(無駄なし家／屑ごみを合理的に始末しましょう／かくれた栄養料理 かくれた経済料理／我が家に生産の余地なきか／家庭織で秋の服飾品をつくりましょう／なおしもの)
1937年12月号	羽仁もと子「われらの目標は明らかなり」
	座談会「時局を語る その三」(10/30開催) 大島義清、小汀利得、近衛秀麿、五来欣造、下村宏、中島弥團次、三宅驥一、羽仁吉一、羽仁もと子
	「家事家計」特集
	一日一銭醜金によるわれらの奉公運動報告(その二) 出征家族の迎年準備への協力など
	東北農村生活合理化運動近況
	その他記事多数(石炭を無駄なく焚く方法／工夫のある住み方／贈り物／家庭織誌上講習)

なお、昭和研究会に直接間接に関わった人々と羽仁夫妻との交流は、1937年から急に始まったものではない。たとえば、羽仁夫妻は東北農村生活合理化運動に着手するにあたって那須皓(農学博士)らのアドバイスを受けており(1935年)、蠟山政道には、女子部高等部の経済グループの指導(1935年)や「自由学園消費経済研究所」構想の指導を受けるなどの関わりもあった<sup>13</sup>。さらに、羽仁夫妻は昭和研究会の教育改革構想を担った「教育改革同志会」に関わりがあり(初期名簿には羽仁もと子も入っていた)<sup>14</sup>、その教育制度改革には一定の賛同を示していた。つまり、羽仁夫妻が近衛体制に寄せた期待の背景には、昭和研究会に参加したメンバーの問題意識(教育問題、農村問題、経済問題等)と夫妻の関心との共通点が確認できる。

### 3.3 戦時下「生活即教育」の展開

#### 3.3.1 生活に基づいた「新しい学問」を社会へ、世界へ

「国民精神総動員運動」と連動して高まってきた学内での消費節約や健康増進への関心等は、これまでの自由学園の教育実践と接続しながら独自の生活教育として展開した。

1930年代の自由学園は、初等教育や幼児教育、男子の教育へと教育活動の場を大きく広げていた。また、特色ある教育内容を公開講座、発表会等を通して広く社会に伝える活動も精力的に行われた。1936年に行われた第一回自由学園夏期大講習会では、当時の最新の教育成果のなかから「フランス式裁断法講習」(講師：中島静江)、「百時間和服付裁縫講習」(青芳とみ子、「絶対音早教育音楽教育」(城多又兵衛・兼松雅子)、「デンマーク体操」(立祥子・船尾信子)が2週間にわたって開講された<sup>15</sup>。こうした活動は「自由学園の文化運動」、「ユニヴァシチー・エクステンション」(大学拡張運動)と意識されていた<sup>16</sup>。

社会的な教育活動は、1931年満州事変以後の世界情勢の変化、対日感情の悪化にあって、なお一層重要な活動として意識されていた。羽仁もと子の国際的な教育会議への参加(1932、1935、1937年)、アメリカおよび中国の教育関係者・キリスト教関係者との親善交流(卒業生山室善子らによる1934年中国訪問、1935、1937年アメリカ訪問等)を通じて、羽仁夫妻は教育を通じた相互理解や関係構築に強い問題意識を持ち続け、1938年には北京に自由学園北京生活学校を開校する。

この時期の自由学園について、後に羽仁吉一は「自由学園の黄金時代」<sup>17</sup>とも表現したほど、ひとつの大きな活動期を迎えていた<sup>18</sup>。当時の『学園新聞』には、創立期の自由学園が「生活」と「教育」を問題にしてきた段階からさらに進んで、「生活」と「学問」を問い直すべきとの主張がみられる<sup>19</sup>。単に生活と従来の学問を一致させるのではなく、生活の上でうちたてられる「新しい学問の道」が目指されたのだった。こうした主張と大正期に書かれた家庭

教育を主に論じた「生活即教育」の語が、強く結びついていった可能性がある。

このように自由学園の教育は、日中戦争開始とその長期化に伴って国民生活の「改革」の必要性が高まる1930年代半ばから40年代にかけてひとつの大きな展開期をむかえた。たとえば、「消費節約」、「貯蓄」、「生産力向上」、「健康」といったテーマについても、自由学園は自前の方法と組織を以て主体的に取り組んだ。そのなかから、幾つか特徴的な教育実践を取り上げてみたい。

### 3.3.2 衣食住の合理化を学びに

戦争遂行のための軍需生産や物資確保のため、国民生活の消費節約や貯蓄が奨励され、代用品の開発などが進められていた。

1938年6月、羽仁もと子は大江スミと共に大蔵省の国民貯蓄奨励委員に任命された。これを受けて、学内でも貯蓄会議が行われ国債購入がすすめられたという。それにとどまらず、卒業生や女子部生徒を中心に、「新生活運動」、「家庭工芸運動」など「簡易生活」の研究や提案がなされた<sup>20</sup>。

女子部の卒業勉強では、1935年度から蠟山政道の指導等によって中流家庭の家計調査が行われていたが、1937年度からはより实际的に衣食住の管理運営にかかる時間、人手、費用などを調査し、それをより能率的に行うための研究が行われた。「食事の調査と改良計画」（1937年度）、「洋裁所要時間精査から得た娘の洋装の目標」、「能率からみた農村主婦の生活調査」、「よい献立を立てるための材料の研究」（1938年度）、「協力裁縫・協力食事の提案」（1939年度）などが行われた<sup>21</sup>。

物資や労力不足が深刻化するにしたがい、より切迫した生活実態を反映した衣食住研究が行われるようになる。生活物資の統制がすすみ、卒業生による自由学園消費組合は実質的に経営できなくなり、「食事中央事務局」に改組（1941年）。卒業生・女子部生徒が中心的な担い手となって、自由学園内各部の食事の献立作成、食材等の仕入れ・分配などの統一的運用を学び実践する機関として運営されることとなった。特に食糧の確保については、配給や学内での生産だけでなく久留米村はじめ近隣の農家から野菜等を直接買入れることもあり、多くの労苦があったという<sup>22</sup>。

### 3.3.3 工作教育の展開

男子部では、多分野の「工作」に取り組むことを通して力学・光学などの基礎を学び、実地の経験に対する理論的反省を以て系統的な学問を学ぶという、総合的な科学教育、技術教育が目指された。こうした「工作教育」は、男子部3年目に直面した日中戦争、それに伴う国の勤労教育重視の動きとも並行して展開し、男子部では1938年頃から本格的に学内の「産業」拠点（豚舎、養魚池、水力発電所、工作所、印刷所）を建設し、養豚や養魚などに取り組んでいく。

「工作」や「産業」の実践は自由学園の「実学」として注目され、1941年4月26日には、自由学園男子部において東京府内中等学校の工作教育協議会が開催された<sup>23</sup>。『学園新聞』でも男子部7年間を通した「工作教程試案」を発表<sup>24</sup>。普通科1年では自転車などの分解・組立、自分が使う机や椅子の製作、2年では望遠鏡、カメラ、測距儀、秤を学び、3年では電信電話の実際、4年で模型および実物グライダーを製作、5年目の高等科1年から初めて純粋理論に移っていくというカリキュラムは、朝日新聞で「自由学園の工作教育」（5回連載）として報道された<sup>25</sup>。

しかしこの時期は「工作教育」の大きな転換期でもあった。男子部の「工作教育」や「産業」は、時局の関係から、工業的なものから食糧増産のための農業研究・生産へと力点を移す必要に迫られていた<sup>26</sup>。国の食糧増産方針に対応して、校内の「空地」を利用した食糧増産や学校農場（那須農場）の開場、畜産、農産加工などが推進された。さらに、1943年には飼料が入手困難になり「産業」で飼育する動物を制限せざるを得なくなっていく。1943年度からは通常の授業としての「工作」も行われなくなった<sup>27</sup>。

### 3.3.4 音楽、体操、美術の展開

自由学園の音楽教育、美術教育、運動・体操といった芸術分野の教育は創立後10年間にそれぞれ発展したが、1930年代半ばからはさらに「教育の社会化」の方向へと大きく展開していく。

音楽では、幼児を対象とした「絶対音早教育」（園田清秀）の実験教室（1935年）や、その発展としての自由学園小学校での音楽教育（1936年）、女子部・男子部（中等段階）での音楽一斉教授（すべての生徒がヴァイオリンなどの楽器を選んで学ぶ）（1937年）と、本格的な音楽教育をより多くの子どもに広げる試みがなされた。

運動・体操についても、1931年前後からデンマーク体操は自由学園の代表的な教育の一つとなってきたが、デンマーク留学を経て体操指導者となった卒業生達は、校内でのデンマーク体操指導と並行して社会的な普及にも取り組んでいく。

さらに1930年代後半には、自由学園が地方都市で音楽やデンマーク体操の発表会を頻繁に開催、広く教育実践を知らせるとともに、その収益を東北セツルメントや北京生活学校の活動費とするなど、芸術教育と社会的活動を一体的に取り組んでいった。一般にデンマーク体操は戦時下の「健民運動」にも取り入れられていくが、自由学園ではデンマーク体操をもとにした「生活体操」<sup>28</sup>が考案されるなどの展開をみせた。

なお、デンマーク体操を通じて高松宮宜仁親王（日本デンマーク協会総裁を務めていた）との関わりができ、さらに李王家の若宮へデンマーク体操の指導を行っている。以後、高松宮家、李王家、秩父宮家といった宮家との関わりが戦中戦後を通して継続された<sup>29</sup>。

自由学園の美術教育については、1932年の自由学園工芸研究所設立の頃から工芸教育に力点を移し、工芸研究所の研究・生産活動は商工省の推進する輸出工芸にも寄与するなど、大きな発展を遂げていた。また、学内の美術教育は山本鼎によって立てられた基本方針（絵画・工芸・鑑賞による教育）が、1940年代に新たに指導者として招聘された若手芸術家達（本郷新、内田巖、吉岡堅二、齋藤長三、佐藤忠良、木下繁）によって引き継がれ<sup>30</sup>、授業停止が余儀なくされるまでは女子部・初等部において美術の時間が断続的に行われていた<sup>31</sup>。

### 3.3.5 継続された授業～英語、羽仁五郎の授業など

多くのキリスト教主義学校では充実した英語教育が行われていたが、戦局が厳しくなるにつれその継続が困難になったといわれている<sup>32</sup>。1942年7月には「高等女学校ニ於ケル学科目ノ臨時取扱ニ関スル件」により高等女学校の「外国語」が随意科目となり、週3回以下とすることが定められた<sup>33</sup>。自由学園女子部では1942年度中は必修科目のままだったようだ。1943年度からは上級生は課外に英語授業が行われたとの証言もある<sup>34</sup>。

1943年度以降も、男子部・女子部とも主に下級生には英語の授業が継続されていたことが、生徒の記録からうかがえる。女子部では、1944年度および45年度1学期（国の方針では授業停止となっていた）にも普通科1、2年では英語の授業（指導：赤木静）が行われ<sup>35</sup>、1年次に学んだこととして、アルファベット、ローマ字表記、数、時計の読み方、生活に関すること（英語表現）、中等教科書Book1全部、日記（英語でつける）等が列記されている<sup>36</sup>。男子部でも、少なくとも1944年度1学期中までは英語の授業が行われていた記録が残っている。例えば普通科2年ではジョン・ミルトンの伝記、ベンジャミン・フランクリン（の伝記カ）、ウォルター・レイモンドの“On Looking at a Field of Wheat”を羽仁恵子や福沢冬子の指導で学んだ<sup>37</sup>。男子部卒業生の回想では、当時は「敵性語」を学んでいるという実感を持っていなかったという<sup>38</sup>。

なお、羽仁夫妻は自らが先生と呼ばれることを好まず、吉一は「ミスタ羽仁」、もと子は「ミセス羽仁」と呼ばれていたが<sup>39</sup>、この名称は1942年初め頃から少なくとも公的な場では「羽仁先生」、「もと子先生」に変更されたようだ<sup>40</sup>。

戦時下の教育の継続という点では、羽仁説子の夫でマルクス主義の歴史家羽仁五郎が、1944年5月に上海へ渡航する直前まで自由学園で歴史や国語の授業を行っていた<sup>41</sup>ことも注目される。古屋安雄（男子部5回生、当時普通科3、4年生頃）は、1941、2年頃に羽仁五郎が自らの西洋史の授業を「現代史の生体解剖」と言い、外務省の極秘文書や新聞の外電記事などを用いた授業をおこなった際の印象を語っている<sup>42</sup>。当時の羽仁五郎は財団法人自由学園の評議員も務めており、学園存続問題にも尽力していた可能性がある<sup>43</sup>。

### 3.3.6 1941年 自由学園教育二十年報告会

1941年12月7～9日に「自由学園教育二十年報告会」が南沢キャンパスで開催された<sup>44</sup>。自由学園教育の全体像を示すため、各部の生活空間である校舎を会場として、そのなかで展示や実演を行った。この頃の自由学園の教育実践の展開をみることができる。

報告会2日目の12月8日早朝に真珠湾攻撃、日米開戦が伝えられた。キャンパス中央付近にラジオの拡声器を取り付け、刻々の重大ニュースが報告会参観者に伝えられたという。この日の国旗掲揚、宮城遙拝の後の礼拝で、羽仁吉一は土師記7章を読み一人ひとりの責任の重大であることを語った。続いて翌1月に入隊が決まっている男子部7年生4人に対し「この全団体の思いを代表する大切な働きをしてほしい。残る時を体に気をつけて送りなさい」と励ま

した<sup>45</sup>。(男子部の「繰上げ卒業」については後述する。)

### 3.3.7 生徒による記録作成

自由学園では草創期から、生徒が自らの生活や学びに対して受け身でなく自覚的に関わることを励ましており、その具体的な方法として、「生活表」(自分の生活を記録する)や自学ノート(先生の板書を写すのではなく、自分で学び得たことを整理する)が奨励された。学び得たことを自らの言葉で書いたり語ったり様々な形で表現する各種報告会(勉強報告会、演劇、音楽、体操、美術工芸)が年に何度も行われ、自治生活においても、委員やリーダーとして公的な役割を果たしたあとに「日誌」や「記録」を作成することも日常的に行われていた。

通常授業が削減され、学外での労働等も増えていく学校生活のなかで、生徒自身による「記録」作成は、むしろそうした不安定化する生活をしっかりと自分たちの学びとするために、より熱心に取り組まれた側面がある。例えば女子部では、学年末の「まとめ」(一人ひとりが自身の一年間の学科と生活を振り返って詳細に記録する)作成が1941年度より取り組まれており、「日番報告書」(その日のクラスの当番が一日の生活を記録する)は1942年度より定期的に作成されるようになった。学徒動員先での活動内容を継続的に詳細に記した記録も残されている。(拙稿「戦時下における自由学園の教育(1)」巻末付属資料の(1)参照)

戦時下の学校生活に関する「日誌」や「記録」が生徒自身によって記され、内容的にも単に自分の所感が書かれるだけでなく、その活動全体をとらえようとする視点をもって記録されたことは注目される。こうした記録が当時の書き手が必ずしも自由に書き記せる状況になかったことも含めて、貴重な戦時記録といえる。

### 3.3.8 戦時下での礼拝

自由学園では創立2年後頃から毎朝、始業前に礼拝が行われていた。前述のように、女子部・男子部では1939年3月から礼拝前に「国民儀礼」(宮城遙拝と君が代斉唱)がおこなわれるようになったが、「礼拝」という言葉や時間自体は戦時中も中断されることはなかった。学徒動員や空襲等で欠席や遅れはあったようだが、礼拝自体は継続されていた<sup>46</sup>。

1943年4月の基本時間(一部)<sup>47</sup>

7時50分	本鈴
8時05分	国旗掲揚、宮城遙拝
8時10分	礼拝
9時	一単位目授業

礼拝を司式し講話を行うのは主に羽仁夫妻で、女子部はもと子、男子部は吉一が担当する場合が多かったという。讃美歌を歌い、聖書を読み、羽仁夫妻がそれぞれの言葉で生活に結びついた講話を行っていた<sup>48</sup>。

男子部および女子部卒業生の回想によれば、特に吉一による礼拝の際には、讃美歌の代わりに明治天皇の「御製」(和歌)<sup>49</sup>に曲(山本直忠作「御製奉唱之曲」<sup>50</sup>)をつけて歌っていたという<sup>51</sup>。女子部日番報告書の記述でも1943年から礼拝で「御製」が取り上げられたことが確認できる<sup>52</sup>。一方で、讃美歌や聖書の箇所も記されており、特に羽仁もと子による礼拝では、1945年になっても聖書・讃美歌を引用した講話が行われていた<sup>53</sup>。

1944年12月29日に全校で終業式とクリスマス礼拝が行われた。この日は工場に動員されていた生徒たちも戻ってきたという。「480名[女子部男子部合計人数カ]礼拝を共にし、学校の畑で取れたもので心のこもったお食事を頂く(煮込みうどん、ブラウンシチュー、つけもの、パンケーキ、みかん)皆の中にいられるだけで涙がこみ上げる。日々ただならぬ戦局の報を聞き、はげしさを加える空襲にさらされながらも、しっかりとしたよりどころとして、羽仁両先生のもと南沢に集まる事が出来ることを心から感謝した」と記されている<sup>54</sup>。

男子部8回生の回想では、戦時中にキャンパス内に学外の人(軍需工場担当者、軍事教練指導者など)の出入りが頻繁となり、讃美歌や聖書を目につくところに置いてはいけないと言われたこと、聖書朗読や讃美歌の声が外に漏れないようなど配慮しながら、羽仁夫妻が自由学園の礼拝を守ったと証言している<sup>55</sup>。また、戦時中のある時期からは生徒各人が学内であっても聖書・讃美歌を持ち歩くことを避けていたとの証言もある<sup>56</sup>。女子部の日誌によれば、1945年4月18日を境に毎朝の礼拝で明治天皇の御製を用いた講話が行われているが<sup>57</sup>、その背景として、1945年1月頃から校内数カ所に学校工場がつけられ(後述)、それとともに学内に軍需工場担当者の出入りが頻

繁になっていたことが考えられる。また、同じ頃に女子部卒業生がスパイ容疑で取り調べを受け<sup>58</sup>、羽仁五郎が北京で逮捕されるといった状況もあった。

### 3.4 女子部・男子部における勤労奉仕・勤労働員

#### 3.4.1 「学徒動員」とは

1937年盧溝橋事件以降、国・文部省が学校教育にもとめた「勤労奉仕」は、その後時局の進展に伴って恒常化、「正課に準ずる」とされ、農業生産や軍需生産に直接携わる「勤労」が「教育」として位置づけられていった。実施日数や作業範囲も年々拡大し、1944年度からは通年動員の態勢が敷かれ、8月には学徒勤労令として法制化、1945年度からは国民学校初等科以外のすべての教育課程が授業停止にいたる。教育はすべて「戦時の必要な要務への挺身」に置き換えられる事態となった。

一方、自由学園（主に女子部・男子部）における「勤労奉仕」や「学徒動員」の展開は、これまでの自由学園の特色ある教育実践と連続的に実施された側面がある。男子部では「工作」（工業、つづいて農業）と接続して、実学の実践として学内に様々な産業拠点を建設し（養豚、養魚、印刷所、工作所、綿羊など）活動した。栃木県那須に学校農場（那須農場）を開場したのもこの時期であった（1941年）。また女子の勤労奉仕・動員については女子部の生活教育や農村セツルメント実践とも連続的に行われた。その結果、自由学園で行われてきた様々な「勤労」は、単に形式的あるいは強制されて実施したものではなく、「自由学園の」教育として自前の方法で主体的かつ積極的に行われた側面がある。とはいえ、そうした実践を国や文部省が指示してきた勤労奉仕・勤労働員の措置と併せてみると、そこには明らかに対応関係がみられる。

本稿末尾の【別表】は、1937年から1945年までの国・文部省が指示した勤労奉仕・勤労働員に関する勅令や通牒から、主に中等教育に対する方針の変遷を整理し<sup>59</sup>、それとともに自由学園（主に女子部・男子部）での主な取り組みをまとめたものである。次項では、特に学外への学徒動員が本格化した1942年度以降の主要な展開を、国・文部省の指示と対応させつつ概観していきたい。

#### 3.4.2 1942～1943年度 学外への勤労働員始まる 自由学園の存続問題と並行して

1941年11月に「国民勤労報国協力令」が制定され、「勤労奉仕」が義務法制化された。これによって中等学校3年以上の生徒は国民勤労報国隊として年30日以内の勤労奉仕が義務付けられ、14歳以上25歳未満の未婚女子の勤労奉仕も同時に義務づけられた。

自由学園では、1941年度中は食糧増産のためキャンパス内の空地開墾や学校農場（那須農場）建設、農村セツルメント（友の会主催）への参加などは行っていたが、それらは基本的に学校施設内や関連団体での活動であり、他所での「勤労奉仕」にはまだ展開していなかった。「学校報国隊」（学徒が勤労奉仕で活動する場合の活動単位）という言葉も生徒の日誌等にはまだ登場しない。

しかし1942年度になると、まず男子部生徒が「学校報国隊」として学外に出勤し始める。6月1日から10日間、男子部普通科4年、高等科1、3年（男子部5、4、2回生）80名が立川獣医器材廠で働いた<sup>60</sup>。また同年7月には、学園敷地内（水力発電所横）に男子部生徒が建設中だった「実験工場」が開場<sup>61</sup>、旋盤を製作した。1943年7月にはその実験工場男子部高等科1年生（男子部5回生）が大日本兵器湘南工機工場の仕事を請け負い、ワッシャーやナットの製作を行った。

1943年度は2度にわたって男子部高等科1～3年生（男子部5～3回生）が「学校報国隊」として陸軍兵器補給廠小平分廠で働いた<sup>62</sup>。同年夏からは学内105か所の防空壕掘り<sup>63</sup>、防空演習、更にキャンパス内3000坪（現男子部グラウンド）の開墾など、年々労働の内容も時間も増えていったことがわかる。女子部生徒も学内の防空壕掘りを行った<sup>64</sup>。

女子部では、1942年秋から高等科生徒が大日本青少年団・帝国農会の委嘱を受けた「大日本青少年団都市女子青年農村勤労奉仕隊」として、千葉、茨城、群馬の農村で農繁期の「共同炊事」と「託児所」の勤労奉仕を開始、1944年まで継続された（女子部21、22、24、25回生）。この活動の背景には、1935年から全国友の会、婦人之友社、自由学園卒業生が一体的に取り組んできた東北生活合理化運動の蓄積があり<sup>65</sup>、こうした自前の枠組みでの社会活動が、42年度からは国の「勤労奉仕」として「活用」されるようになったのであった。

この取り組みは『婦人之友』誌上で詳しく紹介され<sup>66</sup>、「都市女子青年農村勤労奉仕体験発表会」でも自由学園生徒が農村託児所の報告を行った<sup>67</sup>。当時、日本各地で女学生や女子青年団による農村での勤労奉仕の需要が増えており、自由学園のような継続的な実践に裏打ちされた「勤労奉仕」は、モデルケースとして注目された。

戦局の悪化にともなって、(未婚)女子の労働力への期待が高まっていく<sup>68</sup>。新設の「女子勤労挺身隊」を率いる生活指導者として、大日本兵器湘南工機工場等から自由学園女子部卒業生を派遣してほしいとの要望があり、これを機に、女子部卒業生対象の「挺身隊訓練会」が開催された<sup>69</sup>。このように在学者にとどまらず卒業生も含めて「女子の勤労動員」への協力が求められたのだった。

1944年1～3月にかけて、卒業を目前に控えた女子部高等科3年生(女子部22回生)は、「女子勤労挺身隊」として3か所の軍需工場(大日本兵器湘南工機工場、中島航空金属田無製造所、中島飛行機武蔵製作所)、研究所(理化学研究所、東大、東工大)、病院(大東亜病院)他で働き、この活動が卒業勉強としてまとめられた<sup>70</sup>。特に工場では、軍需生産の現場での仕事だけでなく、他の「女子勤労挺身隊」の「娘さん達」と共に生活しながら生活指導や寮の運営なども担当し、大きな評価を受けたという。新卒業生3名は先輩の卒業生2名と共に武蔵製作所に入所、総務部教育課に配属され引き続き女子学徒の生活指導等に当たった<sup>71</sup>。

このように、1942年度以降、自由学園生徒の学外での「勤労」活動が増加している。この背景に、前稿<sup>72</sup>で述べた1943年の各種学校整理(廃止)方針によって自由学園が直面した存続問題があったことは見逃せない。当時、「不要不急の各種学校整理」と「女子の労働力確保・校舎の工場転用」という課題が同じ文脈で語られていた<sup>73</sup>。そうした社会的圧力のなかで、特に女子部生徒や卒業生による勤労奉仕が「大日本青少年団」(社会教育関係団体の統一組織)の枠組みでモデル的に行われ<sup>74</sup>、また軍需工場での女子勤労を支える働き(生活技術指導等)に対して高評価を得ていたのだった。

### 3.4.3 中島飛行機株式会社について

自由学園生徒の主要な勤労動員先であった中島飛行機について簡単にふれておきたい<sup>75</sup>。中島飛行機株式会社は日本航空機生産のトップメーカーで、武蔵製作所(北多摩郡武蔵野町、1938年操業開始)はその発動機(エンジン)工場として日本の全生産量の約3割を生産、周辺には関連企業や施設が点在していた。中島飛行機武蔵製作所は戦争末期の本土空襲における最初期の目標となり、合計9回の空襲を受けている。牛田守彦の調査によれば、空襲による犠牲者として判明している50名弱の大半は10～20代の青少年であり、当時工場に主として働いていた年齢層を反映したものと分析されている<sup>76</sup>。また、北多摩地域は爆弾による空襲に繰り返し見舞われたが、そのほとんどが中島飛行機武蔵製作所を目標とした空襲に関連したものであった。自由学園が所在する久留米村もこうした地域の一部だったのである。

### 3.4.4 1944年 勤労働員の通年化・規模拡大、学校工場化

1944年になってから事態はますます切迫し、2月25日「決戦非常措置要綱」が閣議決定、中等学校程度以上の学徒は今後一年、「常時」動員として通年動員の態勢がとられることとなった。同年8月には「学徒勤労令」「女子挺身勤労令」が公布され、これまで出されていた様々な措置が法制化された。

1944年4月から男子部・女子部の最上級生が中島航空金属田無製造所をはじめとする複数の軍需工場に動員され始め、夏以降は他の学年も次々と近隣工場へ動員、年内には普通科1年生以外のほとんどの学年が動員された。女子部上級生の場合は、前述のように工場内女子寮の管理や生活指導的な仕事も担当した。

学内でも様々な「勤労」が行われた。男子部生徒は軍需工場への動員と並行して、交代で那須農場に赴き、農業生産に取り組んだ<sup>77</sup>。女子部では主として高等科1、2年(25、24回生)が初等部学童疎開(後述)に引率し南沢寮(校内寮)や那須の馬事研究所での疎開生活の支援にあたるほか、学校・寮の総務を担当するなど、学内外の数か所に分かれて生活した<sup>78</sup>。

また、学内に残る下級生(普通科1、2年生)を中心に学校生活が維持され、校内での農作業や防空壕掘り、学校の昼食づくりや寮の朝夕の食事づくりが継続された。1941年春以降、「空地利用」による食糧増産計画で開墾されていた校内には、その後次々に畑がつくられていたが、1944年夏、キャンパスのシンボルともいえるべき「大芝生」もついに開墾された<sup>79</sup>。

一方で、自由学園校内に軍需工場を移転する計画も進んでいた。1944年1月の閣議決定を経て学校工場化（各種学校、特に女子の学校校舎の軍需工場化）の方針が打ち出されており、自由学園でも1944年中から学校工場の準備が進められていたことが、生徒の記録<sup>80</sup>や学校工場の施設賃貸借契約書から確認できる<sup>81</sup>。当時高等科1年（男子部6回生）だった卒業生の証言によれば、1944年11月には男子部校舎（三教室分）にコンクリート工事を施して中島航空金属田無製造所の機械を移転設置し、校内で工場の仕事を開始したという<sup>82</sup>。

### 3.4.5 動員中の生徒の死亡

1944年11月4日、電休日（電力供給がなく工場操業なし）明けに女子部高等科2年生（24回生）が小平村の日立航空機立川工場に戻る途中、乗車していたバスが運行遅れで踏切での一時停止を怠り西武列車と衝突、赤木二葉、高松和子、古川寿美の3名が死亡、他9名も負傷する事態が起きた。卒業生はその時の羽仁夫妻について記録している。「ご遺体が学校に帰ると、ミスタ羽仁は林の中に入って、きれいな紫色の野紺菊など野の花を摘まれ、『この花がよい。花瓶は家にあるからそれに挿そう。頭のそばには水を置いてあげなさい』と指示されました。（中略）ミセス羽仁が『悲しいよ悲しいよ、こんな悲しいことはないよ』とお嘆きになっていらしたことが思い起されます。」<sup>83</sup>9日には学校葬が執り行われた。

同年11月24日、初めて中島飛行機武蔵製作所が空襲を受けた。死傷者は132名<sup>84</sup>、工場寮の至近距離にも被弾。事態の切迫度を判断した羽仁吉一は生徒を工場寮から引き上げさせ、生徒達は学園内の寮から工場まで片道一時間かけて徒歩で通勤する態勢に変更された<sup>85</sup>。

12月3日、女子部高等科3年川田文子が中島飛行機武蔵製作所で勤務中に空襲で死亡した。空襲被害で工場内は混乱、遺体を学校へ帰校させることもかなわなかったという。工場からの出棺の際、吉一が手づから校旗「自由の旗」で棺を包んで見送った姿が卒業生によって記録されている<sup>86</sup>。

こうした死に直面しながらも、生徒たちの工場勤務は継続された<sup>87</sup>。1945年に入ると校内の学校工場での勤務に変更になるものの（後述）、川田文子と同級だった女子部高等科3年生については、3月卒業まで武蔵製作所や田無製造所での勤務が続いたのであった。

※自由学園図書館南側の櫓の木そばに、二つの慰霊碑がある。1987年に建てられた慰霊碑（女子部65回生の卒業制作<sup>88</sup>）には赤木二葉、高松和子、古川寿美、川田文子の氏名が刻まれている。もうひとつの2000年に女子部23回生によって建立された慰霊碑には、23回生川田文子、吉岡豊香（郷里広島で原爆で死亡）の氏名が記されている。このほか、29回生中川峰子は1945年頃から郷里広島に疎開、地元女学校の勤労動員先で原爆に遭い死亡<sup>89</sup>、24回生植村洋子、伊藤武子、渡辺とし子が在学中に病気で死亡した<sup>90</sup>。このように戦時下では各部の生徒たちが疎開等のため休学や退学を余儀なくされ、帰省先で被害にあって病死者もあつた<sup>91</sup>。

当時の生徒が父母宛に書いた12月12日付書簡によれば、毎日の空襲で南沢は危険になってきたため、初等部の1～4年生も那須へ疎開させることが検討されていること、また空襲に備えて「学校の明るい建物〔外壁〕も灰色にカモフラージュし、大芝生も目標になるとのことで、つぶしたそうです」と報告している<sup>92</sup>。

この頃の状況について、羽仁吉一は『婦人之友』（1944年12月号）巻末の「雑司ヶ谷短信」に「教育殉国」と題する文章を残している。夜昼なしの空襲警報、女子部生徒たちの工場出勤、男子部教室を改造した学校工場での製図の勉強、那須農場での激しい労働、初等部生徒の疎開生活（後述）など、各所で奮闘する生徒児童たちの安否に思いをはせ、生徒達の死亡について次のように書いている。

この一と月ほど間に起った悲痛なる出来事は、我々の心を重くする。同志、同学、同行の友と教へ子たちを呼びなして来たが、今や時局の危急に当って、寧ろ戦友といふのより適切であることを痛感する。我々の行学一体の旗印は、戦友の血によって彩られてあると言っても言ひ過ぎではない。戦友の屍を踏みこえて、大東亜戦争の完全なる勝利を目がけて突進するのみである。行学一体と一口にいつてしまへば何でもないうだが、実際に当って真に勤労即教育の理想を実現するとなると、教室で学科を教へる以上の非常なる苦心と努力を必要とする。深い知恵と、それにも増して、教育に対する愛と熱情を必要とする。今や国家存亡の開頭に立って、教育そ

れ自身すべてを挙げて、戦力増強の一途にその全機能を奉仕するの秋が来たのである。しかもそれは、己むを得ざる一時の横道にあらず、そのこと自体が最も力強い教育の正道であることを、我々は確信する。歳寒くして松柏の後凋を知る。ほんたうの教育とは何であるかが、この艱難に満ちた時勢の中で次第に明かにされて行く。<sup>93</sup>

この短文のなかにぎりぎり何が書かれ／書かれなかったかを読み取ることは容易ではない。しかし、「我々の行学一体の旗印」が「戦友の血によって彩られてゐる」という決定的な矛盾と行詰まりに直面したことを、この文章は示している。

### 3.4.6 1945年 学校工場開始

1944年末までに男子部女子部のほとんど全ての学年生徒が複数の軍需工場に動員されていたが、前述のように、1944年中から学校工場化にむけての各工場との契約が締結、1945年1月頃から工場の設備が移転し、下記表3のように校内での労働に切り替えられた<sup>94</sup>。当時、男子部教師として羽仁夫妻を多方面で支えていた宮島真一郎(男子部1回生)は、学校工場化は生徒たちを軍需工場での空襲から守りたいとする吉一(男子部1回生)の意思によって推進されたと証言している<sup>95</sup>。後年、卒業生が「ミスタ羽仁は動員されていく私共のために動員先で少しでも暖かく迎え入れられるように、又安全であるように、あらゆることに手をおつくしになり、心くばりをされて、身をもって皆をかばおうとして下さるご様子が、若かった私共にも強く感じられた」<sup>96</sup>と語っているように、当時の在校生たちが厳しい生活を乗り越えていくにあたって、羽仁夫妻を中心とする家庭的な学校生活の意味は大きなものがあっただろう。

当時普通科2年生だった女子部卒業生は、12月3日の武蔵製作所の空襲、生徒の死とその後の学校工場について次のように振り返っている。その夜工場から帰校した生徒たちを迎えた羽仁吉一は「おーおー、帰ったか」「明日からは、もう行かなくて良いのだよ。どこへも行かなくて良いのだ」と「噛んで含めるよう」に生徒たちに声をかけたという。そして「そのお言葉通り、それから学校工場になりました。実働になるまでの二か月間は、宮島真一郎先生と数学や機械の勉強。温かい先生方のアイデアで、冷たいコンクリート床用には防寒綿靴を、高すぎる機械には、踏み台のすのこを作って準備しました」<sup>97</sup>として、自分の学校で仕事ができるようになった安堵を記している。他の生徒による当時の日誌にも、「四か月半振りて坂を下りた時、胸がわくわくする程嬉しい思ひでした」<sup>98</sup>、「四か月半の工場の生活はやはり中から自由学園の生徒としてよい方からもわるい方からも注目され非常に緊張しお仕事の途中で休み時間をとってあてもなにか気がねのするやうなこともありました。そして学校へかへって来るとほんとうにゆっくりした気持になり休むときは十分休めるやうな気がします」<sup>99</sup>と、学校へ戻ってこられたことが生徒たちにとって大きな安心と喜びだったことがわかる。

だが、前述のように学校工場化を促進する国の方針は1944年初めから打ち出されていた。航空関係工場への空襲激化に伴う「学校工場」化の第一目的は、工場の「分散疎開」であり<sup>100</sup>、生徒の安全確保の観点が含まれていなかった。

表3：1945年1～3月頃(3学期)の自由学園内学校工場一覧(学年は1944年度中)

学校工場の場所	仕事内容	担当学年・備考
男子部校舎(西側2教室):床をはがして旋盤を据付	中島飛行機武蔵製作所の仕事:ジェラルミン製ねじ(発動機用)の製作	女子部普通科2年(女子部28回生)
男子部校舎(一棟)	中島航空金属田無製造所の仕事:機械作業(鋳造、鍛造用治工具、其他諸設備ノ設計、製図) <sup>101</sup>	男子部普通科3、4年(男子部8、7回生)
男子部体育館	中島航空金属田無製造所の仕事:設計・製図(鋳造、鍛造用治工具、其他諸設備ノ設計、製図) <sup>102</sup>	男子部高等科1年(男子部6回生)
男子部工作所・実験工場 ※校外敷地	中島航空金属田無製造所の仕事:材料試験(鋳造材料ノ物理的試験) <sup>103</sup> ノ日立航空機立川発動機製作所の仕事 <sup>104</sup>	男子部普通科3、4年(男子部8、7回生)ノ女子部高等科1年 <sup>105</sup>
女子部体操館 ※「久留米の木型場」への出勤もあり	中島航空金属田無製造所の仕事:航空発動機鋳物部品ノ木型製作 <sup>106</sup>	女子部普通科3、4年(女子部27、26回生)
女子部科学室	中島航空金属田無製造所の仕事:発動機ニ使用スル金属材料ノ化学分析 <sup>107</sup>	女子部普通科3年(女子部27回生)

初等部体育館 (1945年4月17日～)	日立航空機立川発動機製作所の仕事：航空発動機部品製作 <sup>108</sup>	女子部高等科2、3年（1945年度） (女子部25、24回生)
-------------------------	-------------------------------------------	------------------------------------

なお、最上級生の女子部高等科3年（女子部23回生）だけは卒業（1945年3月）まで引き続き3か所の工場に通った。3月末からは男子部普通科1、2年生（男子部9、10回生）は那須農場の労働に従事した。

### 3.4.7 1945年度 学校工場、空襲、農業

1945年3月18日「決戦教育措置要綱」を閣議決定、国民学校初等科以外の授業が4月から一年間停止となった。5月22日「戦時教育令」が公布、学徒は戦時に適切な要務に挺身することとされ、授業停止について、措置の終了期限を定めずに法制化された。これによって、学校教育は1945年度初めから「授業停止」となり、「戦時に必要な要務」、すなわち勤労学徒の活動単位として機能することになったのである。

自由学園では1945年度初等部入学式を延期、男子部女子部では普通科新入生対象の入学式が行われた（高等科入学式は7月まで延期）。例年の入学式では羽仁吉一が新入生に対して「同志同学同行の友として迎える」と言葉を述べていたが、この年はそれに加えて「共生共死の友」と語ったという<sup>109</sup>。男子部新入生31名、女子部51名、7月の高等科入学生51名、空襲の激化する東京の自由学園への入学希望者は減っていなかった。なおこの年度については国の方針で入学試験が行われなかったが、面談は実施されたようだ<sup>110</sup>。

入学早々、男子部普通科1年生も那須農場へ向かい、普通科1～3年生（男子部11～9回生）は那須農場、4年生（男子部8回生）以上は学校工場で働く態勢となった。一方、女子部では普通科1、2年（女子部31～29回生）が校内の農業生産や食事作りなどを担い、3年生以上が学校工場の仕事に従事した。

卒業生の証言によれば、学校工場（昼夜二部制、昼夜深夜三部制もあった）が軌道にのっていたのは1945年5月頃までで、次第に工場からの材料が滞り、生徒人数も疎開等で減るなどして二部制はなくなり、農作業など他の仕事をするようになったという<sup>111</sup>。7月には実質的に殆どの生徒が工場の仕事でなく校内の農業に携わっていた。

久留米村への直接的な空襲は、公式記録としては1944年11月24日を皮切りに7回が判明しており<sup>112</sup>、24日には学内でも窓ガラスが相当割れる被害があった<sup>113</sup>。当時の生徒の日誌等には1945年4月頃からはほぼ毎日空襲警報があり、7月8日には校内の男子部体育館正面外壁面、東天寮食堂壁に艦載機による被弾があった<sup>114</sup>。

## 3.5 教育活動の中断

### 3.5.1 男子部の修業年限短縮と卒業生の出征

1941年10月16日の文部省令第七十九号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ昭和十六年度臨時短縮ニ関スル件」により、1941年度について大学・専門学校・実業専門学校等の修業年限の3ヶ月短縮が定められた<sup>115</sup>。

自由学園男子部では最上級生（7年生）19名が3か月繰り上げで1941年12月に卒業している。1941年時点の男子部（7年制中等教育の各種学校、専検指定未認定、「青年学校と同等以上」認定）は上記の学校（大学・専門学校・実業専門学校等）ではなく、修業年限短縮の対象ではなかったはずである<sup>116</sup>。男子部における修業年限短縮措置の法的根拠は今のところ未判明である<sup>117</sup>。

高等科3年生の一人は、突然の知らせに衝撃を受け11月18日付の日誌に次のように書いている。文部省の通達により12月に高等科3年の繰り上げ卒業との発表があったこと、「自分としては予期せざりし予想外の発表であり、驚いたのはたしかだ。そして戦局の波が我々に打ちつける勢いのすさまじさを改めて思わされた。」<sup>118</sup>

卒業前の12月11日（日米開戦の3日後）、高等科3年（男子部1回生）の木下恰作は日誌のなかで一篇の詩を記した。その最後は次のように結ばれている。「神よ／あらゆる正しきものを統べその中に在したまう神よ／祖国が唯／強国たらんより勝利覇者たらんより／唯義しき国たらんことを希う／汝と共に闘う歓喜にみち／基督の再び誕れたまう愛の国にならんことを希う」。この日誌は（男子部1回生）のクラス日誌であり、クラスメートと羽仁吉一が目を通すものであった。この詩を共有したであろう1回生、そして吉一の思いはどのようなものだったのだろうか。

第一回男子部卒業式は3ヶ月繰り上げで1941年12月28日に行われた。19名中10名は自由学園や那須農場、婦人之友社に勤務の形となったが<sup>119</sup>、次々に出征していった。1942年度から1944年度までは6か月短縮でそれぞれ9月末卒

業となった<sup>120</sup>。

### 3.5.2 男子部卒業生の人数と戦死・戦病死者

1935年4月に開学した男子部（7年制）は少人数制で、1学年1クラス（20～30名）で構成されていた。以来、1945年度までの入学生は311名、1941年から1944年までの男子部卒業生はわずか83名であった。前述の通り、男子部は中学校認可を受けず、専検指定校に認定されたのも1944年5月であったため、男子部卒業生は兵役上の特権なく、いわゆる一兵卒として軍務に服することとなったのであった。

1944年末から、出征した男子部卒業生の戦死の知らせがはいるようになっていた。この頃秘書的な仕事をしていた卒業生によれば、悲報に接した吉一は、人目を避けてその死に涙し立ちすくんでいたという<sup>121</sup>。戦後、吉一の書いたものの中に、出征した卒業生の消息について、また「掌中の珠を失ったような気持ち」と短く記しているほかには、羽仁夫妻の肉声は殆ど記録になっていない<sup>122</sup>。

男子部卒業生11名（当時の卒業生総数の1割強）が太平洋戦争で戦死・戦病死した。11名の方の氏名と逝去日等を記す<sup>123</sup>。（1回生より五十音順）

石川安次（1回生） 1945年8月13日セブ島にて戦死  
 植竹誠郎（1回生） 1944年10月27日ミンドロ海峡にて戦死  
 大倉裕利（1回生） 1945年5月17日沖縄島石嶺にて戦死  
 木下恰作（1回生） 1945年7月25日ビルマ・シッタン河付近にて戦死  
 芦澤久直（2回生） 1945年8月10日グアム島にて戦死  
 木下廣雄（2回生） 1945年5月20日北満にて戦死  
 後藤光男（2回生） 1944年11月17日東支那海にて戦死  
 船越純一（2回生） 1944年11月14日フィリピン近海にて戦死  
 安田文信（2回生） 1945年4月23日大阪陸軍病院にて戦病死  
 坂田慶二（3回生） 1945年6月18日仏印ハノイ野戦病院にて戦病死  
 辻信一郎（4回生） 1945年8月10日中国山西省にて戦病死

※自由学園創立50年にあたる1971年、自由学園正門右手に慰霊碑が建立された。2000年修復の際、遺族の希望で4回生として在籍した木下公雄（廣雄氏の弟）の氏名が加えられ、現在は12名の名前が刻まれている。

### 3.5.3 自由学園初等部の学童疎開<sup>124</sup>

1927年に目白の自由学園校舎の一角で開始された自由学園小学校（設立者羽仁吉一、1928年に小学校令に基づいて設置認可）は、1930年に東京府北多摩郡久留米村の自由学園校地に移転（1934年には自由学園本体も移転）、1941年に国民学校令により国民学校の認定学校となっていた（自由学園初等部に名称変更、以下、初等部）<sup>125</sup>。

1944年6月閣議決定「学童疎開促進要綱」に基づいて東京都区部の集団学童疎開が実施されることとなったが、私立の国民学校認定校については都の集団疎開の対象でなく独自の立場で行うことが定められたため、初等部としては7月中に自由学園内「南沢疎開寮」（清風二寮）への集団疎開の方針を決定した<sup>126</sup>。当時の初等部在籍児童は182名、そのうち比較的遠方から通学する34名が8月21日（二学期始業式）に入寮、最終的には9月初めには70名が寮生となった。（縁故疎開によって22人が個別に疎開した。）この時期、初等部は他校からの転入生も多く受け入れている<sup>127</sup>。

さらに、初等部父母の東胤驒子爵の紹介により栃木県那須にある農林省管轄の「馬事研究所」宿舎（自由学園那須農場とは約4キロの距離にあった）が疎開場所として借りられることとなった。これを受けて9月10日、高学年の5、6年生59名が那須へ出発（のちに62名）、初等部教師2名と女子部高等科2年（女子部24回生）6名が引率した。このように、初等部は校内の「南沢疎開寮」（1～4年生対象）と那須の馬事研究所（5～6年生対象）の二か所に分かれて学童疎開を実施したのであった。

校内の「南沢疎開寮」には、教師（堀江いち）と女子部高等科2年（24回生）6名<sup>128</sup>が寮に泊まり込んで子どもた

ちの疎開生活を支援した。1944年11月24日に初めて中島飛行機武蔵製作所が空襲を受け、以降、この地域にも空襲が始まったことから南沢疎開寮も閉鎖されたとみられるが、閉寮時期は定かではない。その後は巡回家庭訪問指導が断続的に行われたものの、1945年秋まで南沢での初等部教育はほぼ休止状態となった。

一方の那須の馬事研究所宿舎での学童疎開については、前述のように1944年9月10日に出発、終戦後10月まで継続された。近隣に学校農場「那須農場」があり、食糧面でのサポートがあったこと、また同農場で農作業に従事していた男子部生徒たちとの日常的な関わりや、女子部高等科1、2年（25、24回生）が常時数名ずつ「生活指導及び実務担当として」、文字通り生活を共にしながら初等部の疎開生活を支えた（合計11名の女子部生徒が那須疎開寮に携わった）<sup>129</sup>。

久留米村地域でも空襲が頻繁になったことを受けて、1945年1月15日には4年生も那須疎開に加わり、羽仁もと子も那須農場へと疎開した。1944年度に初等部を卒業する6年生は、進学準備のため半年ぶりに東京へ帰ったが、帰京した3月10日は未明に大規模な空襲（東京大空襲）を受けた直後で、子どもたちは到着したとたんその惨状を目の当たりにしている<sup>130</sup>。4月に新4年生も那須疎開に加わり、3学年合わせて約80人規模の疎開生活であった。初等部の疎開生活中に幸いにも大きな怪我や事故はなかったが、疎開から帰京後に児童1名が肺炎で亡くなったことは、この時期の子どもたちが置かれた厳しい状況として記されなければならない<sup>131</sup>。

疎開先での生活と勉強、勤労を「生活即教育」として自労・自治・協力して行うことが目指されたが、食糧不足や厳しい寒さ、長期にわたって家庭から離れて過ごす生活には多くの困難があった。1945年10月に那須から帰京した後、疎開での生活を児童の絵によってまとめた「生活絵巻」（5巻）が残されている<sup>132</sup>。後年に卒業生によってまとめられた文集で、高良留美子は自身が書いた両親宛の手紙について次のように書いている。「これらの手紙は、那須の集団疎開生活の一つの記録ではあっても、ほんとうのことはなにも書かれていない、とさえいえるかもしれないのだ。こうした記録の一片下に、当時のわたしたちの感情生活、精神生活、そして人間関係生活ともいべきものが横たわっていて、それをもひっくるめて言葉にするのは、至難のわざだ。」<sup>133</sup>

### 3.5.4 幼児生活団の休止<sup>134</sup>

1939年1月から「明日館」（目白の自由学園校舎一帯が1930年代から「明日館」として卒業生の社会活動の拠点となっていた）の一角で開始されていた「幼児生活団」（幼児教育）<sup>135</sup>については、1943年度中は連絡帳類が現存し、ある程度継続的な活動が行われていたことが確認できる。

1943年4月頃から非常事態に備えた登園方法の取り決め等がなされるようになった。同年9月20日から幼児生活団でも宮城遥拝が開始されたというが<sup>136</sup>、前述のようにこの時期は自由学園（女子部・男子部）が各種学校として存続問題に本格的に直面し始めていた。1944年度から1945年度にかけての継続的な連絡帳が現存せず、この間の生活団の実施状況は不明である。44年中は拠点となる家庭での活動が継続していたとの証言もあるが、全体としてはおそらく休団状態であったとみられる。1944年夏には羽仁説子が主導する幼児の疎開にむけた「疎開準備練成会」が、生活団の5～7歳児40名を対象に行われ、『婦人之友』に掲載されているが<sup>137</sup>、生活団の疎開は実施されなかった。地方に設置された幼児生活団についても、戦局悪化に従って休止を余儀なくされた。

### 3.5.5 8月15日、その後

生徒達、羽仁夫妻（もと子は那須農場に疎開中）は8月15日をどのように迎え、その後しばらくの時をどのように過ごしたのだろうか。これについて二種類の資料が残されている。ひとつは当日やその直後に生徒が記している日誌や手紙類<sup>138</sup>、もうひとつは1980年代後半に卒業生が当時の記録と回想を合わせてまとめた『自由学園の歴史Ⅱ』等である。当日記録の方が正確な部分もあるが、一方当時の緊張感の中でまだ言葉にできなかった事柄が、後の回想では別の視点から書かれている部分もある。以下でそれらの両方を記してみる。

当日の日誌によれば、前日から15日正午に重大発表があることが知らされており、早朝に空襲のため学校集合は遅れたものの、「今日一日本当に厳粛にすごすやうにとのお話があり、昼まで全員で学校を清めた。（中略）服装をととのへ講堂に入りました。」<sup>139</sup>

「玉音放送」の後、羽仁吉一が生徒たちに語った講話の要旨を、女子部高等科1年生が当日の日誌に記している。「『このやうに陛下にご心配をおかけしここに至ったのは、私共国民総ての真心が至らなかった、足らなかったからで

あり国民の罪である。私共は陛下に対し奉り本当に心からお詫び申し上げなければならない。いや唯お詫び申し上げるだけでなく詔書にお示しになったやうにこれからの日本再建のために今日今から本当に今までの一人一人とうってかはり私共の胸に抱いていた戦勝とは全然反対な結果になったけれど本当の平和を得るため、それはきっと遠いことであるかも知れないけれど、その大使命達成のために全力で進みたい。国体は護持された。そのことは本当に有難いことである。これからの生活は堪え難い忍び難い苦難辛苦が待ってゐるかもしれないけれどそれに打ち勝って本当の名誉、栄誉を得るために努力しよう。自由学園は今まで進んできた道を又一層高くし、この生活をもっともっとよくしてゆくのが忠義の道だと思ふ。』と羽仁吉一先生は強く烈しくおっしゃって下さった」と書いている<sup>140</sup>。このあと、生徒たちは昼食に普段とは異なる「おいしいおむすび」大豆むすびを食べ、掃除をして帰宅した。羽仁吉一は男子部・女子部生徒代表者を連れて皇居に赴いたという。他学年の日記もおおむね同様に記録されている。

一方、女子部卒業生会が後年に編集した『自由学園の歴史II』（1991年発行）には、この日の吉一について別の回想も追加されている。「ミスタ羽仁は、今は皆ものすごく疲れている、と言われ、全校を半分に分けて一時間ずつ交代でお昼寝をさせて下さった。家が焼けた人も多く、電車の中でも立ったまま眠るような状態だったので、それはとても有難かった。ミスタ羽仁は生徒一人一人の顔をごらんになって後『これからの文化は、広島、長崎に落とされた爆弾の現れたような文化ではない』と進むべき道を、厳肅、沈痛な態度で話された。」<sup>141</sup> こうした言葉や行動は当日の日記には記されていないが、当時は疲労や昼寝までを記す気持ちの余裕がなかったのかもしれない。当時の日記には生徒の健康状態がかなり悪かったことをうかがわせる記述も多い。

羽仁もと子は8月15日を疎開先の那須農場で迎えた。「玉音放送」直後の発言について、卒業生は後年に回想している。「陛下の厳かなお声で『終戦布告』と言うお言葉。一瞬〔那須農場〕場内は感無量と緊張に包まれました。と即座にミセス羽仁は『よかった。有難い有難い』と繰り返され、『落ち着いて賢く前進しよう』と私共の動揺した心を汲みとられ励まし導いて下さいました。」また別の卒業生はもと子が「破壊の世の中から建設の世の中になる。何とすばらしい事だ。私は涙涙と小さく書いて、希望希望、と大きく書きたい」「私は明日からする事が一杯ある」とその日中に南沢へ戻ったと書いている<sup>142</sup>。帰校したもと子の第一声は「勇気百倍」、そして「まずよく眠ろう」と語ったという<sup>143</sup>。

他方、当時の日記には別の一面も注意深く記録されている。那須農場から戻った羽仁もと子は毎朝の礼拝で生徒たちを励ましていたが、8月18日礼拝で、次のような言葉を黒板に書いたという。「ほろほると 涙こぼる時も日もあり 力なく哀しき日には小さきこと 特にはげめと 聖霊いふ」そして、「この歌のような詩はいつも〔は〕歌も詩も作ったことは無いけれど、作ろうとも思はなかったのに、ふっと作れた」とのもと子の発言を、女子部高等科1年生が「生活日記」に記している<sup>144</sup>。

敗戦によって戦争遂行のための「学徒勤労動員」は事実上解除されたが<sup>145</sup>、それによって急に教育が正常化したわけではなかった。8月16日以降、自由学園で最初に行われたのは「学校工場」の撤去だった<sup>146</sup>。8月中の生徒記録によれば、16日から「作業場〔中島航空金属田無製造所の学校工場となった女子部体操館〕をすっかり前の体操室にするために」片付けが始まり<sup>147</sup>、8月20日に作業の出来る100人余の生徒で、初等部の掃除（学校工場の片付けを指すと思われる）や女子部体操館に設置されていた木型製作用の机を搬出して、校内から少し離れた「実験工場」に移動させる作業を行った<sup>148</sup>。この時期の男子部の生徒記録は現存しないが、おそらく男子部内の学校工場も同様に撤去されたと思われる。

女子部高等科2年生徒が親に宛てた手紙には、「〔16日以降の〕一週間、学校工場の姿をすっかり消すこと学校を外国の人にみせてもはづかしくないやうに整備することに働きました。（中略）二十日で動員解除になりました」とある<sup>149</sup>。同書簡で、「もう一度あの研磨盤を使いたい。ラッピングをしたいと思ひました。すさまじい感じのした作業室も、機械室はすっかりきれいに油をぬってさびないやうにして作りかけの部品も片付け、暗幕もはづして、音もなく明るい静かな作業室になりました。（中略）一日気をはって生活してゐると負けた悲しみを忘れてみても夜静かに考へると負けたことが悲しくすまないと思ひで思はず考へ込みます」とも書いている。生徒たちにとって、学校工場でのさまざまな努力がまさしく彼等の生活、勉強であり、それが敗戦によって突如失われたのであった。

#### 4. 暫定的なまとめとして

戦時下における自由学園の制度変遷と教育実践の諸相を、現存する当時の記録史料と後年の回想や証言からみてきた。この作業から何がみえてくるだろうか。大まかな見取り図を描いてみたい。

まず、女子中等教育から開始された自由学園の教育事業は、宗教教育も含めた「新しい教育」を行うために制限の少ない「各種学校」を選択し、1930年半ばに設立された男子部もまた中学校令に拠らなかった。これは当時のキリスト教主義の男子中等教育としては他に例がなかった。とはいえ、これは必ずしも羽仁夫妻の孤立した教育構想ではなく、当時の教育制度改革の方向性を先取りするものも含んでおり、特に教育改革同志会（昭和研究会の教育改革構想とも関わりがあった）メンバーの賛同や支援も得ていた。1938年に自由学園は財団法人化するが、実質的な学校経営と教育は羽仁夫妻によって推進された。

戦時体制に入っていくなかで、自由学園はまず男子教育が制度的な問題に直面した（1939年青年学校男子義務化）。中学校の枠組みも専検指定認定を受けない男子部は学校教育としての存立基盤を失う事態に陥った。自由学園は男子部の学則変更を行った上で、社会教育である青年学校と同等以上という認定を受けた。この時期に男子部が青年学校の枠組みで存続を図ったこと理由は明示されていないが、これによってほとんど教育内容を変更せず「各種学校」として継続できたことの意義は大きかったと思われる。

しかし、1943年中等学校令によって中等教育の統制が厳しくなり、「各種学校」が整理対象となることで、存続問題は一段と切迫した。1943年は自由学園にとって実質的な経営母体ともいえる婦人之友社も「企業整備」への対応に苦慮していた。同年10月から、自由学園は中等教育令に沿った形での学則変更を試みる一方（実際に学則変更が完了したかは未判明）、男子部女子部普通科の専検指定認定を申請した。1944年3月末に認定を受けるが、この間、自由学園は「名称変更」を文部省ないし東京都から要求されていたと思われ、認定後にもその事後的な条件として速やかな名称変更が求められた。当時の自由学園にとって専検指定認定は学校存続のための最低限の条件であり、これとからめて名称変更が要求されたのであった。これを乗り切った経緯には、平生夙三郎と岡部長景（当時文部大臣）といった人物の関与があったとされる。平生・岡部の自由学園視察以降、自由学園は大きな学則変更等を行わず、各種学校のまま終戦をむかえた。

他方、自由学園の教育実践はどのように展開したのだろうか。

自由学園の教育は1920年代後半からひろがりを見せ、特に30年代後半に国内外に大きく展開した。その背景には、自由学園の教育成果を学校内にとどめず一般社会へと働きかけることで社会をよくしていこうとする、1920年代後半以降の各種社会活動の蓄積があった。また、従来の学校教育制度の枠組みにとらわれない教育の在り方を「新しい教育」として提示していこうとの問題意識をもっていた。

戦時体制下の多方面における社会改革構想に関わる組織として「昭和研究会」（1936年正式設立）があったが、羽仁夫妻はそうしたグループのメンバーと1930年代前半から農村問題や教育問題などで問題意識を共有しており、昭和研究会の姉妹団体といわれる教育改革同志会とも接点があった。こうした背景もあって、自由学園は戦時の「生活刷新」にも貢献し得る「生活即教育」を自前の方法で積極的に展開し、評価を得ていく。なお、教育改革同志会の1930年代の教育制度改革プランは、戦後日本の教育制度改革とも連続性があるとされる<sup>150</sup>。

戦時下の教育制度改革の一つとして、小学校の国民学校化があったが、自由学園初等部の教育方法（実物による経験重視、合科教育など）は国民学校のモデルケースとして評価された。この同じ教育が数年後には戦後の民主的な教育として再注目されていく。

自由学園（男子部・女子部）における勤労奉仕・勤労働員の展開は、男子部の「工作」や女子部のセツルメント活動など自由学園の特色ある教育実践と連続的に実施された側面がある。とはいえ、そうした実践は国や文部省の指示と明らかに対応関係があった。

1942年度以降は軍需工場への勤労働員が開始され、1943年度後半から「女子職場」の整備に女子部上級生や卒業生も動員されていくが、この頃の自由学園は「各種学校整理」や「名称変更」、実質的な経営母体である婦人之友社の「企業整備」といった複数の問題を抱えていた。1941年に行われた男子部最上級生（高等科3年）の修業年限短縮と繰り上げ卒業の法的根拠は明らかではない。

1944年末からの校舎の学校工場化は、学内的には生徒の生活を守る意思をもってなされたが、政策としては工場疎開の枠組みをもっていた。学徒動員や学童疎開、男子部卒業生の出征によって生徒・卒業生の命が失われた。学校工場の勤労生活の中に学びを見出そうとする努力が重ねられたが、敗戦により、生徒自身がその工場の片付けを行った。

戦時中、羽仁夫妻は毎月の『婦人之友』で多くの記事を著し、教師も生徒たちも多くの記録を書き残した。その諸記録の「一皮下」にあるものを、当時の記録がいつも明示してくれるとは限らない。それでもなお、様々な立場で自由学園の教育に関わった人々によって書き残された記録群を、丹念に注意深く再構成していく作業によって、戦時下自由学園の教育のなかにある様々な継続と切断の実相に迫る可能性がある。

## 注

- 1 福間敏矩『学徒動員・学徒出陣——制度と背景』第一法規、1980年、4頁。「国民精神総動員運動」『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、2015年、219頁。
- 2 基督教教育同盟会でも、加盟校に対し国民精神総動員運動への参加を促す通知がなされた。（『キリスト教学校教育同盟百年史年表』キリスト教学校教育同盟、2010年、22頁。）
- 3 「自由学園における国民精神総動員」『学園新聞』102号、1頁。このほか女子部委員会日誌 一九三七年度 や「男子部週報」\* などにも強調週間に関する記載あり。
- 4 [初等部学校日誌]、1937年10月15日の記述。\*このほか、10月25日の記述によれば、最近の学校内部の変わったこととして「宮城・皇大神宮毎朝遙拝して居ること」が父母会で報告されたという。初等部における宮城遙拝について、高良留美子（初等部13回生、女子部在学）も記録している。（高良真木著・高良留美子編『戦争期少女日記——自由学園、自由画教育、中島飛行機』教育史料出版会、2020年、高良留美子解説、517-518頁。）
- 5 「女子部委員会日誌 昭和十三年三、四月」、「男子部一年史」\*
- 6 「蠟山教授の定期講演開かる」『学園新聞』103号（1937年11月30日）、2頁。
- 7 「体操会に参宮縦走」『学園新聞』号外（1937年11月15日）、1頁。
- 8 「生活即教育」という言葉は、羽仁もと子が『婦人之友』（1924年9月号）巻頭に書いた「生活即教育」がもとになっている。この記事は『羽仁もと子著作集 第十一巻 家庭教育篇下』（1928年初版）に収録された。子どもの教育、特に家庭教育がテーマとなっており、子どもの教育は行儀や知識を教え込むことでなく、子ども自身が考え活動するための「自覚的生活環境」を整えることにあり、特に親自身が真剣に自身の生を生きる必要を説いている。自由学園教育における「自分の生（いのち）の経営」（「自由学園の創立」『婦人之友』1921年2月号所収）と共通する考え方といえるが、発表当初は直接的に自由学園教育を指して使われた言葉ではなく、また学園教育を代表する語としてすぐに定着したのかどうか定かではない。たとえば、1929年に7回生がまとめた「学園生活風景」（小冊子）や、1931年創立10周年前後の関連記事、1932年の世界新教育会議での講演等では、「生活即教育」という言葉は特段のキーワードとしては挙げられていない。（尤も1931年11月の「家庭生活合理化展覧会」（全国友の会主催）に合わせて制作された自由学園紹介の記録映画「自由学園（生活）の展望」は1932年以降、全国各地で上映されるにあたり「生活即教育」とタイトル変更されている。）戦前・戦中期の学園要覧類にも「生活即教育」の語は使われていない。一方、「生活即教育」という言葉が、机上の学問でない、というニュアンスを含んで積極的に用いられる例は、1930年代後半から徐々に確認でき（「新しい学問の道」『学園新聞』100号（1937年7月10日）、1頁）、1942年3月の報告会では「生活即教育の学風」といった表現がある（『自由学園の歴史II』、148頁）。1942年10月の北京生活学校第九回入学式でも「生活即教育、社会即大学、天地即經典」という言葉が羽仁吉一によって語られたという。（山室光子「夕あり朝ありき 北京生活学校近信」、羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 天地即經典」『婦人之友』1943年1月号、98-102頁、108頁。）
- 9 羽仁もと子「友への手紙 『めでたし、恵まるるものよ』」『婦人之友』1932年1月号、38頁。この後のもと子の欧米教育視察・講演における問題意識については、拙稿「自由学園草創期におけるキリスト教と『自由』問題(3)」『生活大学研究』vol. 5（2020）を参照。
- 10 米谷匡史「戦時期日本の社会思想」『思想』882号（1997年）、岩波書店、69-120頁。米谷は「戦時変革」について、「〈戦時挙国一致体制〉への参画を通じて、世界資本主義の没落を促進し、それによって国内の変革・アジアの脱植民地化を実現、社会改革を進めようとする変革のあり方」であると述べている（82頁）。
- 11 昭和研究会（1936年11月に正式設立）は、近衛文麿のプレーントラストとして政治・経済・外交・文化など内外の課題を討議する政策研究団体。そこで討議された政策試案・大綱を随時発表して軍部勢力に対抗しつつ急進的な体制内変革を目指した。昭和研究会の発足は1933年10月の後藤隆之助事務所の発足にさかのぼり、後藤と近衛文麿、蠟山政道を加えて同年12月に設立した。発足当時は自由主義・社会民主主義系の知識人・政治家や無産政党関係者などから構成されていた。青年思想問題、農

- 村問題、教育問題、農林計画などの検討の過程で、革新派の官僚や左派知識人の参加を得ていく。日中戦争直前の1937年6月第一次近衛内閣発足を経て、近衛体制を思想的政策的に支えた。東亜協同体論、新体制運動、大政翼賛会発足（1940年10月）を推進していくが、大政翼賛会の主導権を軍部に奪われる形で昭和研究会は11月19日に解散した。（『昭和研究会』『アジア・太平洋戦争辞典』吉川弘文館、2015年、301-302頁。）
- <sup>12</sup> 高良留美子は自由学園初等部に昭和研究会関係者の子弟が多かったことを指摘している。（前掲、『戦争期少女日記』、解説、517頁。）
- <sup>13</sup> 「学園の新しい経済の勉強」『学園新聞』84号（1935年12月8日）、2頁。
- <sup>14</sup> 拙稿『『生活大学』構想とその展開』『生活大学研究』Vol. 1（2015）、18-19頁、および注102参照。
- <sup>15</sup> 「自由学園夏期講習会近づく」『婦人之友』1936年8月号、210-211頁。
- <sup>16</sup> 羽仁吉一の「雑司ヶ谷短信 山上閑山下忙」『婦人之友』1936年9月号、288頁。
- <sup>17</sup> 羽仁吉一「自由学園の黄金時代」羽仁吉一・もと子著、自由学園創立七十周年記念出版委員会編『自由人をつくる』、自由学園出版局、1991年、48-51頁。
- <sup>18</sup> この頃の自由学園に対する社会的評価・関心のあらわれとして、立教大学で行われた自由学園参観をもとにした座談会の報告がある。（『新興基督教』96~98号（1938年9~11月号、日独書院）に連載。）このなかで異色なのは、清澤冽（学園父兄であった）による自由学園評である。清澤は「ただ僕は、自由学園の特殊な使命を高く評価してゐる故に、羽仁夫妻が余り各方面に手を出さぬことを希望する。今の世の中で、改革すべきことは山ほどある。（中略）その事業が漸く社会の認識を得、順調になって来た時において、最も警戒すべきは潮流に乗りすぎることである。自戒を必要とする」と書いている。（清澤冽「自由学園の教育に賛す」『新興基督教』97号、35-36頁。）
- <sup>19</sup> 「新しい学問の道」『学園新聞』100号（1937年7月10日）、1頁。
- <sup>20</sup> 「我等の目指す簡易生活」『学園新聞』108号（1938年8月1日）、1頁など。
- <sup>21</sup> 羽仁もと子「協力裁縫協力食事の提案」『婦人之友』1940年6月号、37-41頁。「いよいよ実行に移された協力裁縫・協力食事」『婦人之友』1940年7月号、109-115頁。
- <sup>22</sup> 二俣知子「藤岡和子先生突然のご逝去を悼む 教師会を代表して」『学園新聞』355号（1984年11月25日）、2頁。
- <sup>23</sup> [初等部学校日誌]、1941年4月26日記述。\*
- <sup>24</sup> 三石巖「工作教育方針の確立 学園工作教育審議会設置 工作教程試案に就いて」『学園新聞』133号（1941年4月30日）、1頁。
- <sup>25</sup> 『朝日新聞』1941年7月6~11日の5回連載で、1~4年生と高等科の工作教育が写真入りで紹介されている。執筆者は明記されていないが、文中に「われわれの工作」とあるので自由学園指導者の三石巖と思われる。
- <sup>26</sup> 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 晴耕雨読」『婦人之友』1941年3月号、（頁番号なし）。
- <sup>27</sup> [新井正夫（4回生）日記]、1943年1月29日、4月14日記述。\*
- <sup>28</sup> 1938年の体操会でデンマーク体操指導者らによる創案で「生活体操」が行われた。（「快晴の南沢に健康の歌を歌ふ 六日 体操と音楽の会開かる」『学園新聞』110号（1938年11月25日）、1頁。）
- <sup>29</sup> 高松宮家と自由学園との関わりは、1936年6月3日日丁協会主催の晩餐会で高松宮宣仁親王が自由学園教師（デンマーク体操指導者）からデンマーク体操や自由学園について聞いたことに発したとされるが、その後、高松宮殿下が北京で北京生活学校指導者に接見（1939年3月26日）、自由学園視察（1940年5月16日）、戦後も自由学園25周年式典や30周年式典への出席など含む関わりがあった。近衛秀麿（1928年から音楽指導、学園父兄）や宮内省で長く要職にあった木下道雄（1930年から戦後にかけて学園父兄、妻は友の会員）も、自由学園と皇室との関係構築に関わっていたとされる。
- <sup>30</sup> [美術教育の方針について]『学園新聞』148号（1942.10.31）、4頁。1930-40年代の自由学園美術の展開については、拙稿「戦時下自由学園の美術教育運動：『美術』と『工芸』の重層的展開をめぐって」（『生活大学研究』、vol. 2（2016）、9-25頁）を参照。
- <sup>31</sup> 「自由学園勤労報国隊日記(九)女子部普通科四年」\*には1945年3月3日(土)に1年生が美術で学校工場の様子を写生したとの記述がある。土曜日に美術教師が出講していた記述が数か所確認できる。
- <sup>32</sup> 前掲、『キリスト教学校教育同盟百年史』、141-142頁。
- <sup>33</sup> 前掲、『現代教育史事典』、95頁。中学校については同様の通牒は出ていない。
- <sup>34</sup> 「[まとめ] 小野和歌子 昭和十七年度高等科一年一組」\*によれば、1学期41単位、2学期45単位、3学期28単位（週2時間程度カ）の英語の授業（指導：藪下正太郎）が行われていたことがわかる。同じ女子部23回生の文集『自由学園二十三回生の記録 卒業五十年に際して』（1995年）\*によれば、1943年度からは高等科2年については課外で希望者対象に英語教授があったという。（毛利愛子「普通科のころ 思い出すまに」、8頁。）
- <sup>35</sup> 1944年度女子部普通科1、2年英語の授業については、[女子部日番報告書（1945年7月普通科1、2年）]\*、「学部第一回生（三十回生）の七年間のまとめ 昭和二十七年」（女子部29・30回生作成、1952年）\*による。
- <sup>36</sup> 1945年11月に他女学校から自由学園に転入した30回生の一人は、自由学園の生徒が英語が良く出来るのに驚いたという。自由学園では英語の授業が継続していたからだと述べている。（「女子部29・30回生へのインタビュー」『自由学園100年史事業活動

- 報告書 2017年度』(自由学園100年史編纂委員会発行、2018年、67頁。\*)
- 37 「2年生生活日誌 九回生」[男子部9回生、1944年度]\*
- 38 『2001年度共同研究 自由学園と戦争』自由学園最高学部、2002年、51頁。\*
- 39 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 回顧五十年(十一) ミスタ羽仁、ミセス羽仁の呼び方」『婦人之友』1953年11月号、141-142頁。
- 40 [初等部学校日誌] 1942年1月14日の記述\*では、ミセス、ミスタを止め、「リーダー」も「当番」としたことが記され、男子部生徒による「礼拝日誌」1942年2月13日の記述では、ミスタ羽仁を「羽仁先生」、ミセス羽仁を「もと子先生」とすると書かれている。実際にはミスタ、ミセスの言い方も残っていたようだ。
- 41 羽仁五郎『自伝的戦後史(上)』(講談社文庫、1978年、98頁)によれば、羽仁五郎が1944年9月に中国に入ったとされているが、自由学園では1944年5月に上海行きが伝えられて授業が休止されたようだ。羽仁五郎は自由学園北京生活学校の経営を助ける名目で渡航、北京、上海などに滞在、1945年3月に北京市内で再び検束、日本に移送され収監、出所したのは1945年9月であった。
- 42 古屋安雄『キリスト教と日本人 「異質なもの」との出会い』教文館、2005年、160-162頁。授業冒頭で羽仁五郎は、「これからやるのは、現代史の生体解剖だ。だから血が流れる。解剖室で血のついたメスを持つのは当然だが、それを持って病院の廊下を歩いたら、変な目で見られる。まして病院外で持っていったら捕まる。この教室で流す血を外に一切見せない、と誓えるか」と生徒たちに迫ったという。なお、別のインタビューでは古屋はこの授業の時期を1940、1941年頃と語っている。(前掲、『2001年度共同研究 自由学園と戦争』、85頁。\*)
- 43 拙稿「戦時下における自由学園の教育(1)各種学校・自由学園の存続問題を中心に」『生活大学研究』、vol. 6 (2021)、注34参照。
- 44 『学園新聞』139号(1941年11月15日)、同140号(1941年12月15日)。
- 45 前掲、『自由学園の歴史II』、146-147頁。
- 46 [女子部日番報告書(普通科1年カ)]、1945年7月17日記述\*では、「今日は空襲等で礼拝が遅れたので、一単位目はありませんでした」とある。
- 47 [女子部日番報告書(普通科1年)]、1943年4月19日記述\*。
- 48 前掲、『自由学人 羽仁吉一』、67-90頁。
- 49 羽仁吉一の蔵書として、佐々木信綱『明治天皇御集謹解』(第一書房、1941年)があり、これが用いられていた可能性がある。
- 50 『自由学園全校音楽曲集III』(自由学園、出版年不明)\*にこの曲が収録されている。
- 51 古屋安雄「羽仁吉一 かげのひとのねうち」『キリスト教と日本人:「異質なもの」との出会い』教文館、2005年、163頁。御製については複数の卒業生が証言している。(前掲『2001年度共同研究 自由学園と戦争』所収、2回生沖島光也、5回生猪狩朝彦、8回生永田晨、8回生野村潤各氏による証言)なお、2002年度卒業研究「羽仁もと子・吉一 家庭・教育・信仰」(松友大、若林寛佑)\*での礼拝の調査([女子部日番報告書] 1942-1948年中の記述による)によれば、この期間で最も多く御製が取り上げられたのは終戦後の1945年年内だった。このことは、敗戦後、占領下における羽仁夫妻の皇室重視の姿勢とも対応しており、さらなる検討が必要である。戦後の問題は、『自由学園100年史』(刊行予定)第I部第五章を参照されたい。
- 52 1943年度から女子部日番報告書の用紙に礼拝の項目がなくなっており、礼拝内容を日常的に記載する形式になっていない。
- 53 女子部普通科4年(女子部26回生)が継続的に記した「自由学園勤労報国隊日記」には、中島航空田無製造所から帰校し学校工場に勤務開始した1945年1月からの学校礼拝の記述がある。1945年7月23、24、26日には那須から一時的に帰京していた羽仁もと子が生徒たちにマタイ伝や詩篇を引用しながら語っている。('自由学園勤労労働員日記(十五)')\*
- 54 前掲、『自由学園の歴史II』、195頁。「勤労報国隊日記(六)」\*にも記載あり。
- 55 前掲、『2001年度共同研究 自由学園と戦争』、100頁。\*
- 56 「高等科一年一組 生活日記(二十)」、1945年10月16日記述\*。
- 57 「自由学園勤労報国隊日記(十一)」、1945年4月18日記述など\*。
- 58 笠原徳「軍需工場で憲兵の訊問」『自由学人 羽仁吉一』、197-200頁。
- 59 学徒動員に関する教育措置等の資料については、『近代日本教育制度史料 第七巻』および福岡敏矩『学徒動員・学徒出陣——制度と背景』(第一法規出版、1980年)の本文および資料編を参考にした。以降、個別の勅令や通達についての出典は省略する。
- 60 [男子部生活日誌、当該学年分]\*
- 61 「物心一如の体験 初の学園工場整備労働終る」『学園新聞』143号(1942年4月15日)、2頁。
- 62 「学校工場の目的とは何か」『学園新聞』156号(1943年7月31日)、1頁。
- 63 防空壕掘りについては、主に男子部生徒が検討段階から担当した。1941年の「委員会事務日誌」では2月3日に防空壕建設委員会が組織され、8日に田無教育隊に防空壕の見学に行ったとの記述があり、この頃から検討が開始されたようだ。校内の防空壕掘りが本格化したのは1943年8月頃からで、1944年になっても続けられていたことが、当時の日誌類や、[新井正夫(男子部4回生)日記]、[船越泉(男子部6回生)日記]から分かる\*。
- 64 1944年秋から、女子部25回生が男子部教員の宮島真一郎(男子部1回生)指導で女子部敷地に53~54個の防空壕を掘ったとい

- う。(赤木和子「鏝(カスガイ)」『一粒の麦 宮嶋眞一郎先生を偲ぶ』自由学園・共働学舎発行、2016年、15-16頁。)
- 65 詳細は遠藤邦子「農村セトルメント運動の展開 自由学園・全国友の会・婦人之友一体となって」(『生活大学研究』vol. 6 (2021))を参照。
- 66 羽仁説子「農繁期託児所」『婦人之友』1942年9月号、34-43頁。羽仁説子「四つの託児所の経験」『婦人之友』1942年10月号、94-103頁。「農繁期勤労奉仕の記録より」『婦人之友』1943年8月号、53-60頁。
- 67 1943年7月10日に日本青年館で行われた。(『自由学園の歴史II』、162頁。)
- 68 1943年9月13日次官会議決定「女子勤労働員ノ促進ニ関スル件」により、14歳以上25歳未満の未婚女性を対象として「女子勤労挺身隊」の自主的結成を推進された。
- 69 25才以下の卒業生有志(16名)が、男子部実験工場で訓練のほか、生活指導に必要な体操・衣食住の勉強をしたという。(「女子卒業生 工場生活指導者に」『学園新聞』158号(1943年10月30日)、2頁。)
- 70 「昭和十九年一月十五日 三月十九日 記録 中島航空金属田無製作所 二十二回生」[女子勤労挺身隊の生活指導記録]\*
- 71 笠原徳『生き生きと 絵日記で綴る戦後五〇年』(さきたま出版会、1996年)には、笠原らが実施した「女子特別技術講習会」を描いた「生活絵巻」が収録されている。この他にも、鈴木三枝子「戦闘機に捧げた青春」(『NHK戦争を知っていますか①一語り継ぐ女性たちの体験』日本放送出版協会、1989年所収)がある。
- 72 拙稿「戦時下における自由学園の教育 (1)各種学校・自由学園の存続問題を中心に」『生活大学研究』、vol. 6 (2021)。
- 73 「令嬢の“有閑校”に断 みんな職場で総進軍」(1943年5月4日朝日)や「女子挺身隊 各種学校でも結成 不要不急の進学に断」(1944年2月25日朝日)といった記事見出しからも、「不要不急の各種学校整理」と「女子の労働力確保・校舎の工場転用」は一連の課題として捉えられていた。
- 74 「座談会 決戦体制と学徒動員」(『婦人之友』1943年8月号、6-14頁。)
- 75 戦後アメリカによって行われた対日戦略爆撃に関する調査・研究「米国防略爆撃調査団」報告によれば死者220名という数字があり、牛田守彦の調査によって、50名弱の犠牲者氏名が判明している。(牛田守彦『戦時下の武蔵野I 中島飛行機武蔵製作所への空襲を探る』ぶんしん出版、2011年、16-23頁。)
- 76 同前、20-21頁。
- 77 当時那須農場に勤務していた男子部卒業生(2回生)の日記によれば、「四月十四日 学徒動員による七年生六名到着。羽仁先生よりの厳肅なる動員令書を携え、顔付きも新鮮に緊張して頼もしい」とある。「学徒動員」同様の心構えて那須農場で働く、という意味であろう。(池田通恵編『南沢 我が心の故郷 ～安田文信日記』、自由学園男子部2回生発行、1994年、241頁。)
- 78 「赤木和子様へのインタビュー」(2016年7月26日実施)『自由学園100年史事業 活動報告書IV 2016年度 自由学100年史編纂委員会、2017年5月、63-75頁。\*また諸事情で勤労働員に参加できなかった生徒数人も学内で総務や「羽仁先生係」を担当した。
- 79 『自由学園の歴史II』、184頁。
- 80 1944年11月22日、中島航空金属田無製造所に動員中だった生徒達は近日中に工場から学校へ戻る旨知らされている。(「自由学園勤労報国際日記(五) 女子部普通科四年」\*)
- 81 財団法人自由学園が3つの会社(中島飛行機株式会社、中島航空金属株式会社田無製造所、日立航空機株式会社立川発動機製作所)と交わした「施設賃貸借契約書」\*によれば、中島飛行機と中島航空金属との契約締結日は1944年12月1日、日立とは1945年2月1日である。なお、こうした学校工場化に直接関係する一次史料が現存するのは稀である。1945年8月20日付で、重要書類等ノ処置ニ関スル件」として焼却処分の指示がでていたことが、他学校の資料から判明している。(大平聡「宮城県白石女子高等学校所蔵公文書綴の検討：女子挺身隊関係文書を中心に」『キリスト教文化研究所研究年報 民族と宗教』第39号、宮城学院女子大学、2005年、128-132頁。)
- 82 藤田整(男子部6回生)「戦時下の自由学園、学校も工場に」『自由学人 羽仁吉一』自由学園出版局、2006年、194頁。藤田氏は、学校工場化について、羽仁吉一が生徒の安全に配慮して決断したが、田無製造所長が女子部在校生の父親だったことも迅速な学校工場化の一因だっただろうと推測している。このことは複数の卒業生の回想でも言及がある。
- 83 『自由学園の歴史II』、187頁。
- 84 前掲の「米国防略爆撃調査団」報告による死傷者数。(前掲、牛田守彦、17頁。)
- 85 「空襲と川田文字さんの殉職、南沢からの通勤(23回生日報・日誌より)」『自由学園の歴史II』、婦人之友社、1991年、202-203頁。
- 86 『自由学園の歴史II』、192-194頁。このほか望月愛子「川田さん遭難から三日間の日記」『二十三回生の記録』\*
- 87 同じ武蔵製作所に動員されていた女子部普通科2年の高良真木の日記(前掲、『戦争期少女日記』、362-364頁)によれば、12月4日にも工場へ「登校」している。女子部普通科3、4年の田無製造所での勤務も12月末まで続いた。
- 88 佐藤富士子「南沢の庭にモニュメント制作 戦時中の悲しみをかえりみ、平和を願って」『自由学園女子部卒業生会報』95号

- (1987年3月)、5頁。\*
- <sup>89</sup> 2020年9月6日西尾淳子氏インタビューによる。\*
- <sup>90</sup> 平岡敏子「昭和十四年四月入学」『自由学園女子部卒業生会報』66号(1977年1月)、7頁、10-11頁。\*
- <sup>91</sup> 当時の在校生・卒業生の安否情報は必ずしも全貌が判明しているわけではない。今後も引き続き出来るだけ多くの情報を収集し記録する態勢をとっている。(窓口：自由学園資料室042-422-1097)
- <sup>92</sup> 1944年12月12日付、望月文子差出父母宛手紙による。(前掲、『戦時中の記録』、128-129頁。)\*
- <sup>93</sup> 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 教育殉国」『婦人之友』1944年12月号、32頁。
- <sup>94</sup> 正式に学校工場として承認されたのは1945年3月だったようだ。中島航空金属株式会社田無製造所の「学校工場化実施承認願」(1945年3月30日付)(20170935001)\*は、翌日付で関東軍需管理部長から承認を受けている。
- <sup>95</sup> 宮島真一郎「指導者としての強い責任感」『自由学人 羽仁吉一』自由学園出版局、2006年、183-184頁。
- <sup>96</sup> 前掲、平岡敏子「昭和十四年四月入学」、10頁。
- <sup>97</sup> 女子部28回生「工場生活の頃 六二 [昭和62]・六・二二 佐々木記」『戦時中の記録』、198頁。\*
- <sup>98</sup> 「自由学園勤労報国隊日記(六) 女子部普通科四年」、1944年12月30日記述。\*
- <sup>99</sup> 「自由学園勤労報国隊日記(七) 女子部普通科四年」、1945年1月3日記述。\*
- <sup>100</sup> 1944年12月30日発総一一七号 各地方長官宛、官公私立大学高等専門学校長宛、総務局長「学校校舎転用ニ関スル件」(文部時報)には、「極力学校校舎等ノ転用ニ依リ航空機工場ノ分散疎開ヲ図ルハ刻下喫緊ノコトニ有」とあり、学校校舎等の転用目的が明記されている。(前掲、『学徒動員・学徒出陣』所収資料(一八三)、169頁。)
- <sup>101</sup> 前掲、中島航空金属株式会社田無製造所「学校工場化実施承認願」(1945年3月30日付)及び男子部6回生三宅進氏メモによる。\*
- <sup>102</sup> 同前。
- <sup>103</sup> 同前。
- <sup>104</sup> 男子部実験工場で女子部高等科1年が担当した日立航空機株式会社立川発動機製作所の仕事については、学校工場化に関する賃貸借契約書が現存しない。
- <sup>105</sup> 前掲、『自由学園の歴史II』、198頁。
- <sup>106</sup> 前掲、中島航空金属株式会社田無製造所「学校工場化実施承認願」(1945年3月30日付)\*
- <sup>107</sup> 同前。
- <sup>108</sup> [財団法人自由学園・日立航空機株式会社立川発動機製作所 学校施設賃貸に関する]「契約書」(1945年2月1日)(20170940001)\* 賃貸借対象の施設として、初等部体操館だけでなく同炊事場、物置も含まれている。[財団法人自由学園・日立航空機株式会社立川発動機製作所 学校施設賃貸借に関する]「契約書」(1945年3月)(20170938001)\*によれば、「工作室」のうち24坪を立川発動機製作所側の「従業員合宿所」とする旨記されており、立川発動機製作所従業員用の設備も一定程度整えられたことがうかがえる。
- <sup>109</sup> [新井道夫日記]、1945年4月11日記述。\*
- <sup>110</sup> [1945年度入学者関係資料](歴史II編集資料)および「自由学園勤労報国隊日記(十) 女子部普通科四年」、1945年3月26、28日記述。\*
- <sup>111</sup> 女子部28回生「旋盤でネジを作る 普通科二年」『自由学園の歴史II』、206頁。
- <sup>112</sup> 『東久留米のあゆみ第3巻 東久留米の近代史 明治・大正・昭和』東久留米市教育委員会、2012年、131-136頁。
- <sup>113</sup> 「自由学園勤労報国隊日記(五) 女子部普通科四年」、1944年11月24日記述。\*
- <sup>114</sup> [男子部生活日誌、男子部8回生]\*
- <sup>115</sup> 前掲、福間、119頁。
- <sup>116</sup> 男子部1回生柿崎平四郎は、後年の講演で「自由学園は文部省のいうことを聞かないで勝手なことをしていたわけですが、このたび自由学園男子部は、農村の青年学校と同等ということにしてやるから、そのかわり在学年限を短縮せよ、ということになり、私達は来年卒業と思っていたのが、その年の暮れに卒業となりました」と証言している。(2013年6月15日柿崎平四郎講演(於自由学園クラブハウス)ののめ寮、東久留米・南部9条の会主催)「戦中戦後を生きて、今思うこと」書き起こし記録より。)\*
- <sup>117</sup> 福間敏矩は、1941年10月16日の修業年限短縮に関する勅令およびそれに伴う種々の省令、通牒の前に、9月時点で修業年限短縮に関する「内報」があり、各学校種別にそれに準備するよう通牒が出ていたこと、そのなかに十月八日発普二五〇号「中等学校最高学年在学者ニ対スル臨時措置ニ関スル件」があり、中等実業学校生徒についても三月繰り上げて卒業させる旨の内報があったとする。(前掲、福間、106-107頁。)しかし、実際の10月16日勅令では中等実業学校についての修業年限短縮は記されておらず、『学制百年史』でも1941年時点での中等学校への措置について言及がない。
- <sup>118</sup> [男子部生活日誌 7年生(1回生)]、1941年11月19日記述。\*
- <sup>119</sup> 「昭和十七年度(昭和十七年六月末現在)自由学園男子部父母会名簿」および「十八年度同名簿(昭和十八年七月一日現在)」に

- 卒業生名簿が付されている。\*
- <sup>120</sup> 秋吉美也子は、長兄船越純一（自由学園男子部2回生）の1942年9月繰上げ卒業、東京政治経済研究所就職、1943年12月入営、44年10月佐世保から出立し戦死したことについて、家族の視点から書いている。（秋吉美也子『いつも天気』、豊企画、1984年。）
- <sup>121</sup> 桐淵妙子「戦死の悲報とミスタ羽仁の涙」『自由学人 羽仁吉一』、188-189頁。
- <sup>122</sup> 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 喪われた青春」『婦人之友』1946年7・8月号、64頁。同「雑司ヶ谷短信 未完成の学者」『婦人之友』1948年8月号、64頁。同「雑司ヶ谷短信 男子部開学二十年」『婦人之友』1955年6月号、142頁。
- <sup>123</sup> 逝去年月日は『同学会名簿』（自由学園同学会発行）\*による。1950年5月1日に行われた男子部創立20周年記念同学会および戦没者記念会では、戦死・戦病死10名、未帰還2名とされていたが、その3年後に未帰還2名のうち木下廣雄（2回生）戦死、岡田敬介（5回生）ソ連で健在が判明し、戦死・戦病死者は11名となった。木下廣雄氏に関する表現はご遺族のご意向による。
- <sup>124</sup> 菅原然子は、自由学園初等部の学童疎開について、国および東京都の学童疎開の政策との関連も含め、東京都内の私立小学校（当時は国民学校認定校）の事例として当時の記録史料を整理・分析している。（菅原然子「第二次世界大戦下における自由学園初等部の学童集団疎開」『生活大学研究』、vol. 6 (2021)。）初等部は東京都北多摩郡久留米村に位置しており（この地域は東京都区部の国民学校の疎開受入地だった）、私学の学童疎開として独自に実施した側面が大きかったが、基本的には「帝都学童集団疎開実施要領」（1945年6月30日）及び同細目（7月10日）に沿って行われた。
- <sup>125</sup> 自由学園初等部の設立経緯および国民学校化については、菅原然子「国民学校におけるカリキュラム実践モデルとなった自由学園初等部」（『生活大学研究』vol. 2 (2016)、26-49頁）を参照。
- <sup>126</sup> [初等部学校日誌]、7月12日、14日記述。\*
- <sup>127</sup> 途中入学志願者審査に19名応募、全員入学とした。（[初等部学校日誌]、1944年8月14日記述。\*）
- <sup>128</sup> [初等部学校日誌]、8月21日記述。\*
- <sup>129</sup> 村上せつ「自昭和十九年九月十日 至二十年十月二十五日 那須疎開生活記録 自由学園初等部」（1987年作成）\*
- <sup>130</sup> 矢島伸子「運命共同体『勝つまでは』」『あしおと 私達の学童疎開体験』、145頁。
- <sup>131</sup> 前掲、『あしおと』、122頁。前掲、『戦争期少女日記』所収解説、522頁。
- <sup>132</sup> 1945年10月に帰京後、その年度中に作成されたと思われる。前掲の村上せつによる「那須疎開記録」\*によれば、羽仁もと子から那須疎開生活についての報告会をするよう言われていたが機を得ず、絵巻（絵は当時初等部5年生児童）を作って報告会に代えたという。
- <sup>133</sup> 『『元気です』』というのは主観的には嘘ではなかったかもしれないが、『楽しかった』『面白かった』という言葉は書きながらもずい分抵抗を感じたものだ。ほんとうには楽しくも、面白くもなかったからだ。そして自分でも、昔なら同じことをすればもっと心から楽しかったのに、といぶかしく思ったものだった。だからこれらの手紙は、那須の集団疎開生活の一つの記録ではあっても、ほんとうのことはなにも書かれていない、とさえいえるかもしれないのだ。こうした記録の一片下に、当時のわたしたちの感情生活、精神生活、そして人間関係生活ともいべきものが横たわっていて、それをもひっくるめて言葉にするのは、至難のわざだ。（高良留美子「那須からの手紙」『あしおと 私達の学童疎開体験』（企画編集：自由学園初等部14回生、1977年、138頁。） 菅原は、疎開児童自身の体験記録や回想文等の重要性和同時に、こうした記録にどのようにアプローチしていくべきか、質的調査の方法検討が不可欠としている。（前掲、菅原然子「第二次世界大戦下における自由学園初等部の学童集団疎開」。）
- <sup>134</sup> 詳細は『自由学園100年史』（刊行予定）第Ⅱ部幼児生活団第三章を参照。
- <sup>135</sup> 幼児生活団の設立経緯やその教育方法の歴史的経緯については、菅原然子「幼児生活団の教育構想にみる英米ナースリースクールの影響：1930年代の羽仁説子の幼児生活への関心を手がかりに」（『生活大学研究』vol. 3 (2017)、20-42頁）および同「幼児生活団の設立経緯 羽仁もと子・説子の幼児と母へのはたらきかけ」（『生活大学研究』vol. 1 (2015)、54-70頁）を参照。
- <sup>136</sup> [淀橋生活団へあてた羽仁説子の手紙]（[6才2学期 連絡帳抄録] 所収）、1943年9月15日(水)記述、及び[6回生5才2・3学期 連絡帳抄録]、1943年9月20日(月)記述。\*
- <sup>137</sup> 羽仁説子「幼児たちも疎開が出来るか 一つの実験報告」『婦人之友』1944年10月号、裏表紙。
- <sup>138</sup> 女子部日番報告書には普通科3年、高等科1年1組、同2組の日番（その日のリーダー）による記述がある。男子部生活日誌には当日の記述がなかった。「高等科一年一組 生活日記」（終戦後にそれまでの「自由学園勤労報国隊日記」を改称）にも詳しい記述がある。さらに当時の高等科2年生後藤智子（女子部25回生）が8月15日前後の事柄について親に書き送った手紙も現存する。\*
- <sup>139</sup> [女子部日番報告書]、1945年8月15日記述。\*
- <sup>140</sup> 「高等科一年一組 生活日記（十七）」、1945年8月15日記述。\*
- <sup>141</sup> 前掲、『自由学園の歴史Ⅱ』、239-240頁。

- <sup>142</sup> 「戦時中のミセス羽仁（那須農場） サブロー清子（松岡）記」および〔無題〕 鶴沢和子記より、『戦時中の記録』125頁、147頁。この証言が『自由学園の歴史II』（240頁）に収録されている。
- <sup>143</sup> 前掲、『自由学園の歴史II』、240頁。
- <sup>144</sup> 「高等科一年一組 生活日記（十七）」、1945年8月18日記述。\*
- <sup>145</sup> 戦時教育令が廃止されたのは、10月6日（勅令第564号「戦時教育令廃止ノ件」）であった。
- <sup>146</sup> 学校工場の撤去作業は、自由学園独自の判断ではなく文部省や東京都からの指示だったと推測される。他校所蔵文書によれば、戦時期資料等の焼却処分の指示がでていた（注81参照）。
- <sup>147</sup> 「高等科一年一組 生活日記（十七）」、8月16日記述。\*
- <sup>148</sup> [女子部日番報告書]、普通科3年および高等科1年2組の日番の記述による。\*
- <sup>149</sup> [1945年8月23日付カ織田智子差出両親宛て書簡コピー]\*
- <sup>150</sup> 土持ゲーリー法一『米国教育使節団の研究』玉川出版部、1991年、129-134頁。久保義三他編著『現代教育史事典』東京書籍、2001年、39-40頁。

## 勤労奉仕・勤労動員関連事項と自由学園（主に女子部・男子部）の取り組み（1937年～1945年）

	月	政府決定事項、時勢等	月	自由学園（女子部・男子部）での「勤労奉仕」「学徒動員」等
1937	7	7日 盧溝橋事件、日中戦争勃発		
	7	31日 文部省「今回の北支事変に関し執るべき措置に関する件」（派遣応召軍人の遺族に対する援護等を目的に「労力奉仕」始まる）		
	8	24日 「国民精神総動員実施要綱」閣議決定		
	9	28日 文部省「国民精神総動員運動実践事項」	10	13～19日、「国民精神総動員強調週間」女子部・男子部から臨時委員として生徒14名が指名され、各委員を中心に一日ごとの課題に取り組む ※国民精神総動員関連行事は1937、1938年に実施あり
			11	21日 女子部：久留米村の出征家族を訪問、前日に手作りした1300個の日の丸まんじゅうを配る
1938	4	1日 「国家総動員法」公布		
	6	9日 文部省「集团的勤労作業運動実施二関スル件」（「集団勤労」を夏季休暇前後等の適当な時期に概ね5日実施すべきこと、主な作業として、学校設備に関する手入れや作業、応召軍人遺族家族に対する農事家事手伝い、神社寺院等の清掃、防空施設や軍用品に関する簡易作業、土木に関する簡易作業等を示す）	—	男子部：「産業」拠点の建設に取り組む（3/24豚舎建設、5/24養魚池建設、欧文印刷所岸準備（1940年6月完成）、7/7工作所建設、8月綿羊小屋建設）
			9	男子部・女子部合同で「部隊生活」活動試行（約1週間、綿羊隊、温室隊、農芸隊等の作業に励む）
			10	4日 「銃後後援強化週間」開始 各部代表者の明治神宮参拝、久留米村の出征家族の訪問、慰問袋製作など
1939	3	31日 文部省「集団勤労作業実施二関スル件」（中等学校以上に対し、集団勤労作業を「漸次恒常化」し、正課に準じて取り扱うよう指示。実施時期は夏季・冬季休業に限らず随時行うものとする）	7～8	東京府の通牒を受け、夏休みは「鍛錬生活と奉仕」の期間とし、小学部、男子部、女子部それぞれ登校日を定め、特別勉強実施。以降、夏休みは休暇ではなく鍛錬と奉仕の期間との位置づけが定着
	8	8日 「興亜奉公日設定に関する件」閣議決定（毎月1日を「興亜奉公日」とする）	9	1日 興亜奉公日 一汁一菜や日の丸弁当の実行、勤労奉仕をして戦地の苦勞をしのぶ 久留米村の青年男女を招いて生活学校開催 ※以後断続的に興亜奉公日の活動あり
			11	15日 女子部：慰問袋千個を製作
1940				
1941	2	8日 文部省「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」（30日以内を授業を廃止し勤労奉仕にふりあてる）	1～3	男子部：東京帝大農学部佐々木喬教授の指導を受け、校内の空き地4000坪のうち2500坪の食糧増産計画策定、男子部・女子部が分担して開墾
			5	男子部：栃木県那須に土地を取得。専門家の指導を受け、学校農場建設のための測量作業を行い、開墾、建築、農作業に取り組む
			6	女子部：高等科3年、羽仁説子の指導で、東北セツルメントの農繁期託児所で卒業生と共に働く
	8	8日 文部省「学校報国団ノ隊組織確立並其ノ活動ニ関スル件」（高等・中等教育機関に「学校報国隊」（学徒が勤労奉仕・動員で活動する際の活動単位）の組織化を指示）		
	10	16日 「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」「昭和十四年法律第一号兵役法中改正法律中改正ノ件」公布（大学・専門学校等の3カ月の修業年限短縮）		

勤労奉仕・勤労働員関連事項と自由学園（主に女子部・男子部）の取り組み（1937年～1945年）続き

月	政府決定事項、時勢等	月	自由学園（女子部・男子部）での「勤労奉仕」「学徒動員」等	
11	「国民勤労報国協力令」制定（勤労奉仕が義務法制化。中等学校3年以上は国民勤労報国隊として年30日以内の勤労奉仕、14歳以上25歳未満の未婚女子の勤労奉仕が義務づけられる）	11	男子部：自由学園那須農場開場。男子部生徒が農作業を担う	
12	8日 真珠湾攻撃、日米開戦	12	28日 男子部：最上級の高等科3年（男子部1回生）、3カ月繰り上げで卒業（1942年以降は9月卒業）	
1942	5	26日 「昭和十七年度国民動員実施計画策定二関スル件」閣議決定（学校の種類を問わず、14歳以上の学生生徒が動員計画に盛り込まれる）	5	女子部：高等科3年、東北セツルメントの農繁期託児所で卒業生と共に働く
		6	男子部：1～10日 普通科4年、高等科1,3年80名、立川獣医器材廠で働く（「学校報国隊」として初めて学外へ勤労働員）	
		6	男子部：6月15日 「実験工場」建設・開場、東京帝大名誉教授の横山勝任（工作機械学）の指導で旋盤製作	
		10～11	女子部：高等科3年、大日本青少年団・帝国農会の委嘱を受けた「大日本青少年団都市女子青年農村勤労奉仕隊」として、千葉、茨城、群馬の農村で「共同炊事」と「託児所」の勤労奉仕を行う	
1943	4	文部省次官会議で、専検指定校を訓令12号の対象校に転換する方針決定		
	5	3日 「昭和十八年度国民動員実施計画策定二関スル件」閣議決定（常時要員の供給源として各種学校在学者を含める）	6～7	女子部：高等科3年、大日本青少年団・帝国農会の委嘱を受けた「大日本青少年団都市女子青年農村勤労奉仕隊」として、千葉、茨城、群馬の農村で「共同炊事」と「託児所」の勤労奉仕を行う
	6	「国民勤労報国協力令」改正（勤労期間が30日から60日に延長、年齢上限が40歳から50歳に引き上げられる）	7	男子部：高等科1年、実験工場にて大日本兵器湘南工機工場の仕事を請け負う（ワッシャー、ナット製作）
	6	25日 「学徒戦時動員体制確立要綱」閣議決定（「教育錬成内容の一環」として国土防衛と勤労作業に動員できる体制を確立するという趣旨で、これ以降、軍需工場への動員が本格化）	6・9	男子部：高等科1～3年が「学校報国隊」として陸軍兵器補給廠小平分廠で働く
			7～8	男子部：学内105か所の防空壕掘り、学内3000坪開墾
	9	13日 次官会議「女子勤労働員ノ促進ニ関スル件」14歳以上の未婚女性を対象として「女子勤労挺身隊」の自主的結成が推進される	9～11	女子部：高等科2,3年、大日本青少年団・帝国農会の委嘱を受けた「大日本青少年団都市女子青年農村勤労奉仕隊」として、千葉、茨城、群馬の農村で「共同炊事」と「託児所」の勤労奉仕を行う
	10	12日 「教育二関スル戦時非常措置方策」閣議決定（1年につき1/3程度の期間の勤労働員、学校の修業年限の抑制と学校の整理統合方針が提示される）	11～12	女子部：卒業生を対象に「挺身隊訓練会」開催、男子部実験工場で訓練ほか、生活指導に必要な体操衣食住の勉強を行う
1944	1	18日 「緊急国民勤労働員方策要綱」「緊急学徒勤労働員方策要綱」閣議決定（1年に4か月の勤労働員、学校工場ができることとなる）	1～3	女子部：高等科3年、卒業前に「女子勤労挺身隊」として3カ所の軍需工場、研究所、病院等で働く。その際、ほかの「女子勤労挺身隊」と共に生活するなかで、生活指導や寮運営などで高い評価を受ける
	2	25日 「決戦非常措置要綱」閣議決定（中等学校程度以上の学徒は今後1年、「常時」動員として通年動員の態勢となる）		
	3	7日 「決戦非常措置要綱二基ク学徒動員実施要綱」閣議決定（各種学校特に女子の学校の軍需工場化を急ぐ）		

## 勤労奉仕・勤労働員関連事項と自由学園（主に女子部・男子部）の取り組み（1937年～1945年）続き

月	政府決定事項、時勢等	月	自由学園（女子部・男子部）での「勤労奉仕」「学徒動員」等
		4～9	男子部：高等科3年、9月卒業まで「学徒挺身隊」として、13名が中島航空金属田無製造所、大日本兵器湘南工機工場で働き、6名が那須農場で働く
		4～3	女子部：高等科3年、87名の約半数が中島飛行機武蔵製作所、中島航空金属田無製造所、大日本兵器湘南工機工場で勤労開始、8月からは残り半数が同様に勤労働員される
		6	女子部：高等科1,2年生、北関東・東北地方での農繁期共同炊事と託児所の勤労奉仕を行う
8	23日「学徒勤労令」「女子挺身勤労令」公布（これまでの様々な措置が法制化される）	8～	女子部：普通科4年40人全員中島航空田無製造所に動員（入所式8月11日、全員校内寮に入寮～12月1日まで）、12月29日まで工場勤務、その後は学校工場で勤務
		9	女子部：高等科2年5名が那須への初等部学童疎開に引率、学内では南沢寮での初等部児童への生活指導、学校・寮の総務担当なども担当 11月から高等科2年と交代し1年4(5)名が那須疎開の生活指導を担当
		9	15日 女子部：高等科2年15人住友通信機工場（田町、明日館の工芸研究所アトリエを宿舍）に動員
		10	女子部：高等科2年30人日立航空機立川工場（工員寮とは別の一戸を寮として）に動員
		10	男子部：普通科3年以上、小平兵器補給廠等で働く
		秋	女子部：男子部教員の指導で防空壕掘りを行う
		11	4日 女子部：高等科2年生が日立航空機立川工場へ戻る途中、交通事故で3名死亡、ほか9名負傷
		11	24日 男子部：普通科4～高等科2年が中島航空金属田無製造所へ動員宣誓式へ出席、この頃には男子部校舎に中島航空金属田無製造所の機械を移転設置、男子部生徒は入所式以降は学校工場で作業
		11	24日 女子部：中島飛行機武蔵製作所空爆を受ける工場寮が至近距離だったため、生徒を工場寮から引き揚げさせ、以降は徒歩1時間かけての通勤とする この日、自由学園校内にも空襲被害があった
		11	女子部：普通科2年（49名）武蔵製作所へ、普通科3年（人数不明）が田無製造所へ動員（いずれも入所式11月29日）
		12	3日 女子部：高等科3年生1名が中島飛行機武蔵製作所で勤務中、空爆で死亡
1945		1	1944年11月頃から1945年4月にかけて中島飛行機などの各工場の設備が学内に移動、男子部・女子部生徒は学校工場での労働に切り替えられる（女子部高等科3年生のみ3月卒業まで工場勤務継続）
	3 18日「決戦教育措置要綱」閣議決定（国民学校初等科以外の授業が4月から1年間停止）	4	初等部入学式延期、男子部入学式（11日）、女子部入学式（12日）は普通科入学生のみ 高等科入学式は7月まで延期
	5 22日「戦時教育令」公布（授業停止について措置の終了期限を定めずに法制化。学徒は戦時に適切な用務に挺身することとされる）	4～	女子部：普通科1,2年が校内の農業生産や食事作り担当、3年生以上は学校工場で働く

戦時下における自由学園の教育 (2)戦時下「生活即教育」の諸相

勤労奉仕・勤労働員関連事項と自由学園（主に女子部・男子部）の取り組み（1937年～1945年） 続き

月	政府決定事項、時勢等	月	自由学園（女子部・男子部）での「勤労奉仕」「学徒動員」等
		4～	男子部：普通科1～3年那須農場へ、4年以上は学校工場へ

「100年史関連論考」は、自由学園100年史（デジタルアーカイブ）編纂の基礎調査の成果を直接間接に下敷きとし、その調査過程で生じた論点を、著者の視点で深めた試論です。100年史編纂委員会による確認を経ますが、各論考の内容責任は著者にあります。なお、論文で使用している資料は、原則として自由学園資料室の公開基準内のものですが、一部、現在整理中の未公開資料を使用している場合があります。詳細については自由学園資料室（042-422-1097）へお問い合わせください。